岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 58

# 龍 王 塚 古 墳

——新岡山空港建設に伴う発掘調査——

1984

岡 山 県 教 育 委 員 会

# 序

埋蔵文化財は，わが国の歴史や文化を理解するために欠くことのできないもので，貴重な国民的財産として尊重し，保護保存されなければなりません。私たちは，これらの価値あるものを大切にし，後世に伝えなければならない責務を負っております。

岡山県は，瀬戸内海や中国山地に面した豊かな自然環境と気候風土に恵まれ，歴史的にも古代より栄えたところであります。このため多くの遺跡が所在することから，文化財の保護保存については特に慎重に対処しているところであります。しかしながら，最近の開発事業の増加に伴い，埋蔵文化財の保護保存との調整が大きな課題となっております。

ここに報告します龍王塚古墳は，新岡山空港の航空安全確保施設予定地内にあって現状保存が困難なことから，やむなく記録保存のための発掘調査を実施したものであります。その結果，横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の比較的巨大な円墳であることが判明し，多数の副葬品が出土しております。この調査の成果が広く活用され，地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いであります。

終りになりましたが，発掘調査ならびに報告書の作成にあたって，岡山県文化財保護審議会委員をはじめ，岡山県企画部新空港建設室，岡山県新岡山空港建設事務所および地元の方々から賜りました多大な御指導と御協力に対し，厚く御礼申し上げます。

昭和59年6月

岡山県教育委員会

教育長　宮　地　暢　夫

# 例　　言

1. 本調査報告書は，岡山県教育委員会が岡山県企画部の委託を受けて実施した，新岡山空港建設工事に伴う龍王塚古墳の発掘調査概要である。
2. 龍王塚古墳は，岡山市杉谷字小歳544—1に所在した。
3. 現地での発掘調査は，岡山県教育委員会文化課職員福田正継が担当し，昭和58年8月8日から11月14日まで実施した。

   なお，新岡山空港建設予定地内に所在した2か所の祭祀遺跡推定地についても，龍王塚古墳の発掘調査と並行して確認調査を実施した。
4. 現地の発掘調査および報告書の作成にあたっては，岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏，近藤義郎氏，水内昌康氏から御教示と御助言を得た。
5. 土器の整理や復元は，坪井和江氏と細田美代子氏のお世話になった。
6. 鉄器の整理や復元は，伊井瑞恵氏のお世話になった。
7. 須恵器の実測と浄写は，岡山県教育委員会文化課職員高畑知功氏の御協力を得た。
8. 土器の拓本は，岡本香織氏のお世話になった。
9. 鉄器，玉類，耳環の実測と浄写は，山本悦世氏の御協力を得た。
10. 石庖丁と石鏃の実測と浄写は，山田雅子氏の御協力を得た。
11. 本調査報告書の執筆や編集は，福田が行った。
12. 龍王塚古墳の出土遺物，実測図，写真等は，岡山県教育委員会文化課分室（岡山市西古松265）に保管している。
13. 本調査報告書に使用した高度値はすべて海抜高であり，方位は第1図と第2図を除いて磁北である。
14. 本調査報告書に掲載した第2図は，建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（総社東部，東山内）を貼り合せて複製したものである。

# 目　　次

第１章　地理的・歴史的環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……3
第２章　調査の契機と経過……6
　第１節　調査の契機……6
　第２節　調査の経過……7
　　日誌抄……8
第３章　古墳の立地状況と調査前の概観……10
第４章　発掘調査の概要……13
　第１節　墳丘と外部施設……13
　　墳丘……13
　　周溝……14
　　前庭部・墓道・閉塞施設……15
　第２節　石室の掘形……15
　第３節　石室の構造……16
　　奥壁……17
　　玄室の東側壁……18
　　羨道の東側壁……18
　　西側壁……19
　　天井石……20
　第４節　古墳の構築過程……20
　第５節　遺物の出土状況……22
　第６節　出土遺物……22
　　土器……26
　　武器……26
　　馬具……28
　　棺具……29
　　漁具……32
　　装身具……32

第７節　龍王塚古墳に伴わない遺物……33
弥生時代の遺物……33
平安時代の遺物……33
中世の遺物……33
第５章　まとめ……35

## 図　目　次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　龍王塚古墳周辺遺跡分布図(1/25000)……4
第３図　龍王塚古墳調査前墳丘測量図(1/200)……10
第４図　龍王塚古墳墳丘測量図(1/200)……11
第５図　龍王塚古墳石室実測図(1/60)……12—13
第６図　龍王塚古墳断面図(1/60)……12—13
第７図　石室内天井石(1/60)……16
第８図　龍王塚古墳石室平面図(1/60)……17
第９図　遺物出土状況(1/60)……22
第10図　龍王塚古墳出土須恵器(１)(1/4)……23
第11図　龍王塚古墳出土須恵器(２)(1/4)……24
第12図　龍王塚古墳出土大刀(1/4)・刀子(1/2)・刀装具(1/2)……27
第13図　龍王塚古墳出土鉄鏃(1/2)……28
第14図　龍王塚古墳出土馬具(１)(1/2)……29
第15図　龍王塚古墳出土馬具(２)(1/2)……30
第16図　龍王塚古墳出土鉄釘(1/2)・飾金具(1/2)・釣針(1/2)……31
第17図　龍王塚古墳出土勾玉(1/2)・切子玉(1/2)・耳環(1/2)……32
第18図　龍王塚古墳周辺出土弥生式土器(1/4)・石庖丁(1/1)・石鏃(1/1)……34
第19図　龍王塚古墳周溝内出土平安時代土師器(1/4)……34
第20図　龍王塚古墳周辺出土中世土師質土器(1/4)……34

## 表　目　次

表—1　龍王塚古墳出土土器観察表……25

## 図 版 目 次


図版１－１　調査前墳丘残存状況（北から）
　　２　調査前墳丘残存状況（南西から）
図版２－１　表土除去後墳丘全景（南西から）
　　２　表土除去後墳丘遠景（西から）
図版３－１　石室正面羨道部遠景（南から）
　　２　石室正面羨道部近景（南南東から）
図版４－１　周溝検出状況（西から）
　　２　周溝検出状況（南から）
図版５－１　石室内奥壁周辺石組状況（南から）
　　２　石室内羨道部周辺石組状況（北から）
図版６－１　石室内天井石架設状況（南から）
　　２　羨道部入口付近盛土状況（西から）
図版７－１　墳丘北側周溝土層断面（西から）
　　２　墳丘西側周溝土層断面（南から）
　　３　墳丘東側周溝土層断面（南から）
図版８－１　墳丘横断土層断面（南から）
　　２　墳丘縦断土層断面（西から）
図版９－１　墳丘西側土層断面（南から）
　　２　墳丘東側土層断面（南から）
図版10－１　墳丘盛土除去後古墳遠景（西から）
　　２　墳丘盛土除去後石室全景（南から）
図版11－１　墳丘盛土除去後石室全景（西から）
　　２　墳丘盛土除去後石室全景（東から）
図版12－１　墳丘盛土除去後石室全景（南東から）
　　２　墳丘盛土除去後石室全景（北西から）
図版13－１　石室外玄室側壁石組状況（西から）
　　２　石室外玄室側壁石組状況（東から）
図版14－１　石室外天井石周辺石組状況（西から）
　　２　石室外天井石周辺石組状況（北から）

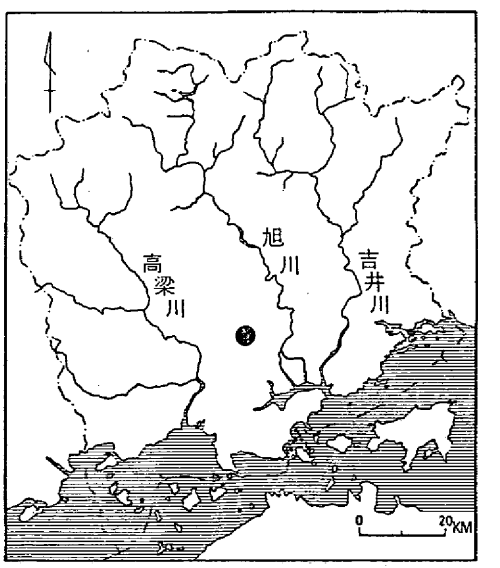
図版15—1　墳丘検出作業風景（西から）
2　墳丘盛土観察用畦除去作業風景（西から）
図版16—1　墳丘盛土除去作業風景（北西から）
2　墳丘盛土除去作業風景（南西から）
図版17　龍王塚古墳出土須恵器（1）
図版18　龍王塚古墳出土須恵器（2）
図版19—1　龍王塚古墳出土須恵器（3）
2　龍王塚古墳出土鉄鏃
図版20—1　龍王塚古墳出土大刀・刀子・刀装具
2　龍王塚古墳出土鉄釘・飾金具・釣針
図版21—1　龍王塚古墳出土馬具（1）
2　龍王塚古墳出土馬具（2）
図版22—1　龍王塚古墳出土勾玉・切子玉・耳環
2　龍王塚古墳出土鉄滓
図版23—1　祭祀跡推定地A地点調査前全景（北から）
2　祭祀跡推定地A地点調査後全景（西から）
図版24—1　祭祀跡推定地B地点調査前全景（西から）
2　祭祀跡推定地B地点調査後全景（西から）

# 第1章　地理的・歴史的環境

## 第1節　地理的環境

龍王塚古墳は，岡山市杉谷字小歳544—1に所在した。

吉井川及び高梁川とともに岡山県の三大河川のひとつである旭川は，岡山県の中央部を中国山地の蒜山高原から真庭郡勝山町や御津郡建部町などを経て，蛇行しながら児島湾に流れる。川幅が広くなって流れが緩やかになる御津郡御津町金川地区では，上房郡賀陽町に源を発する宇甘川が合流する。旭川と高梁川のほぼ中間地点には足守川が存在するが，上流の岡山市大井地区では日近川が合流している。これらの宇甘川，旭川，日近川，足守川に囲まれた龍王塚古墳の所在地周辺は，標高414$m$を測る十二本木山を最高峰に，比較的緩やかな高原になっている。この高原からは，笹ケ瀬川，中川，砂川などの大小の河川が南に向かって流れているが，下流の平野部では流れが急激に緩やかになって「天井川」を形成している。龍王塚古墳に最も近接した河川は，砂川上流の安部倉川であるが，水量が極めて乏しく，夏期になると農業用水にも事欠く状況で，流域には安部倉ダムや横尾池などの人工湖が構築されている。龍王塚古墳の南に位置する鳩ケ岩山や妙見山の山麓には，安部倉川に沿って階段状に並んだ狭い水田が認められる。また民家に近接した平坦な丘陵部や緩斜面は，桃を主体に栽培した果樹園が開墾されている。



第1図　遺跡位置図

龍王塚古墳の東脇に丘陵尾根上を南北方向に走る山道は，古代の備前と備中の国境を示すもので，龍王塚古墳は備中側に位置した。この国境を示す山道を北に進み，安部倉の集落から西に折れると，周囲の地形の様相が大きく変化する。すなわち，これまで比較的平坦であった道程が急激に勾配の急な坂道に変わり，深い谷間を屈曲しながら杉谷の集落に通じている。

杉谷の集落に見られる民家は，急斜面にへばり付くように数軒が集まって建ち並んでい

る。谷間の小川は滝のように流れ，日近地区で日近川に合流する。この小川の流域には谷間を可能な限り開墾した水田が認められ，一部には圃場整備事業も進められていた。

杉谷から日近の集落へ下ると，日近川に沿って開けた沖積平野が展開する。この平野は両脇に急峻な丘陵が迫っている細長いもので，日近川の源まで奥深く平坦地が続いている。この日近の集落で左折して南西に進むと，岡山市の大井や足守に至る。逆に北東に溯ると，勝尾峠を経て宇甘川流域へ到達し，さらに御津町金川地区や加茂川町に至る。

安部倉の集落から西に折れて民家の間の細い道を抜けると，安部倉川流域の細くて狭い沖積平野が展開する。安部倉川に沿って北東へ溯り，安部倉ダムの右岸をさらに進むと，著名な日蓮宗の寺院である日応寺が所在する。この日応寺には，中世に造られたと考えられる国指定重要文化財の毘沙門天立像（註1）と不動明王立像（註2）が安置され，県指定重要文化財の「千射大工友行，永和三季歳次丁巳十月日」という陰刻銘のある梵鐘（註3）も存在する。「永和三年」は1377年に相当するから，この梵鐘は南北朝時代に鋳造されたことがわかるが，もとは児島湾の水底に沈んでいたものを岡山市妹尾の盛隆寺に奉納され，そのうちに日応寺に移されたと伝えられている。この日応寺の伽藍を見つめながらさらに北東に進めば，岡山市立少年自然の家の北に位置する龍王岳の山麓に至る。この地域には自然の美しさがよく残り，放牧を営む牧場が数か所に認められる。

安部倉の集落から安部倉川に沿って蛇行しながら南に下ると，豊川稲荷や伏見稲荷とともに日本三大稲荷のひとつに数えられている最上稲荷の北東約1.5㎞に位置する長野の集落に至る。長野の集落に近接した地点では，深い谷底を道が通っているために道幅が極端に狭くなり，西脇を流れる川の流れも急に速くなる。長野の集落から大窪を経て南に進むと，岡山市一宮で国道180号線に至る。右折すれば総社を経て倉敷や高梁方面に行くが，左折すれば約6㎞で岡山市街地に到達する。

安部倉の集落から東に向かって進めば，容易に岡山市街地に行くことができる。このコースは所々で屈曲しているものの，比較的平坦で幅広い道路が続いている。田原の集落を経て約7㎞進めば，岡山市栢谷で国道53号線に至る。田原から栢谷の集落へ抜ける中間地点には野谷温泉が所在し，笹ケ瀬川上流の清水が流れる美しい谷地形になっている。栢谷の交差点で左折すれば津山方面の県北地域に通じるが，右折すれば岡山市津高を経て約10㎞で岡山市の中心地に到達する。

このように龍王塚古墳が所在した地域は，美しい自然環境に恵まれたのどかな農村地帯で，西には日近川流域の急峻な谷地形が認められるが，北から東にかけては比較的緩やかな高原になっている。岡山県南部地方のほぼ中央に位置し，岡山や倉敷の市街地のみならず県北地域からもそれほど遠くない距離になっている。

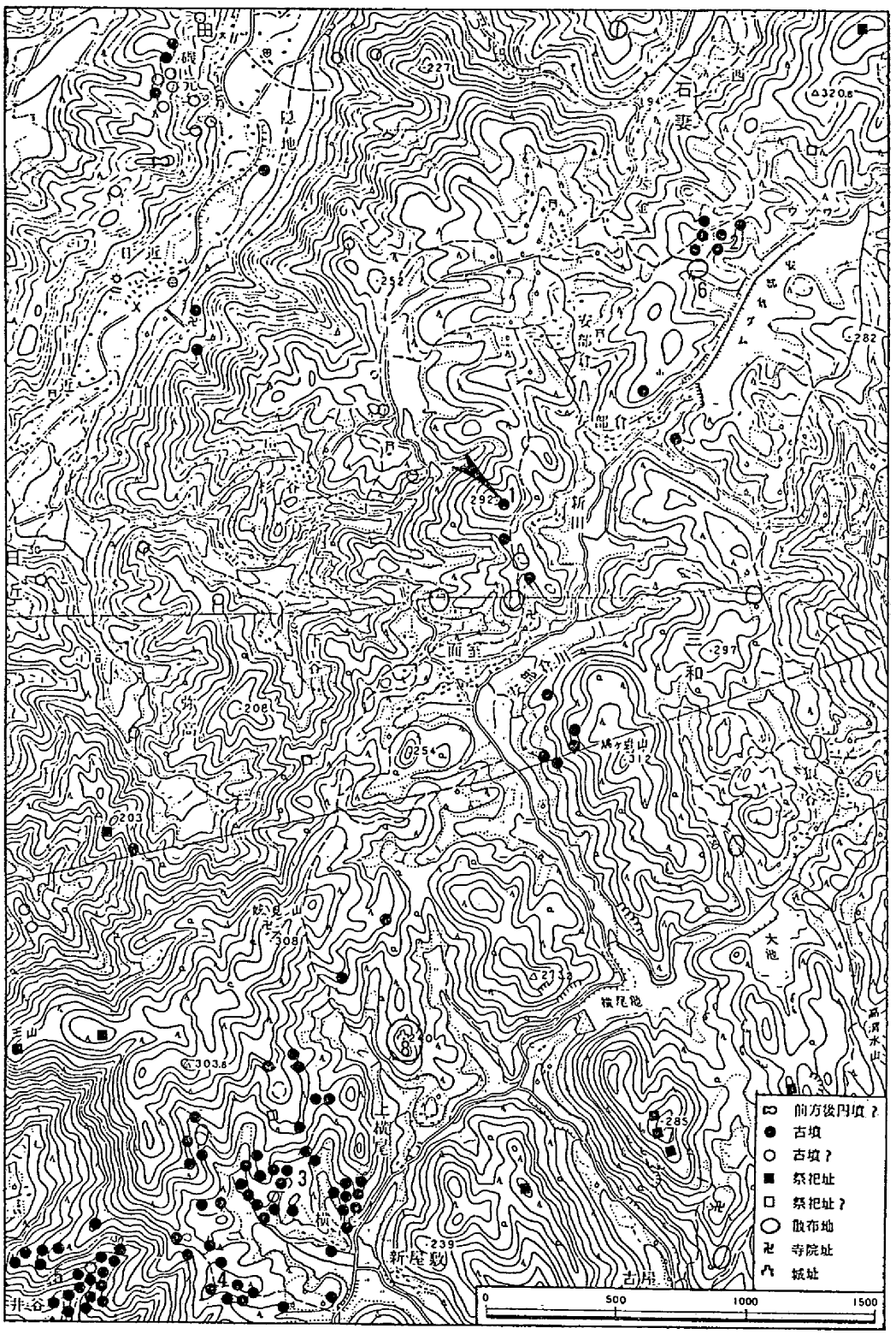
# 第2節　歴史的環境

龍王塚古墳の所在する周辺地域は，市街地から離れていることもあって，あまり遺跡の存在が把握されていない所である。新空港の建設計画が策定された段階に，岡山県教育委員会は岡山市教育委員会の応援を得て現地の遺跡分布調査を実施するとともに，これまでに出版されている文献による資料収集を行った。遺跡分布調査で新しく発見された遺跡は，『岡山市埋蔵文化財分布地図』（註４）に追加記載しているが，龍王塚古墳は，昭和５年に刊行された永山卯三郎著の『岡山縣通史』（註５）に「大正８年以来の実地調査に係る馬屋上村所在の古墳」としてすでに記載されている。今回の発掘調査に参加した人達の話によると，地元ではこの龍王塚古墳のことを「龍王さん」と呼んで近年に至るまで信仰の対象になっていたというから，かなり以前から周知されていたことがうかがわれる。

龍王塚古墳の周辺では，旧石器時代や縄文時代の遺跡は，現在のところ発見されていない。

弥生時代の遺跡は，龍王塚古墳の南に位置する丘陵の尾根や斜面に確認されているが，いずれも弥生式土器の破片が採集されているだけで，遺跡の規模や性格は不明である。石妻の集落に面した丘陵の斜面にも散布地が存在するが，弥生式土器の破片が採集されているものの，詳細は明らかでない。このように現時点で確認されている弥生時代の遺跡は，いずれも土器片を採集した散布地でその内容が確実に把握できないが，龍王塚古墳周辺に位置する丘陵の尾根や斜面に集落跡が存在する可能性は極めて強いと考えられる。

古墳時代の遺跡は，龍王塚古墳も含めて比較的多く確認されているが，そのほとんどの遺跡は古墳であり，古墳以外のものは土師器や須恵器の破片を採集している散布地である。これらの散布地は弥生時代の散布地と同じ地点であるから，弥生時代から継続して生活が営まれていたことが推察される。龍王塚古墳の南に位置する谷に面した斜面には，２基の古墳が確認されている。どちらも横穴式石室を内部主体に有する円墳で，石室の一部が破壊されている。龍王塚古墳に近接した北側の古墳は，直径約10$m$，玄室幅約1.25$m$の規模である。南側の古墳は，直径15$m$，高さ約２$m$の墳丘で，石室全長約7.3$m$，玄室長約3.4$m$，玄室幅約1.7$m$，羨道幅約1.1$m$を測る片袖式の石室になっている。鳩ケ岩山の西山麓には５基の円墳が群集して存在するが，いずれも横穴式石室の円墳である。残存状況が極めて良好な古墳の計測値は，直径約15$m$，高さ約３$m$の墳丘で，石室全長約6.7$m$，玄室長約4.0$m$，玄室幅約1.6$m$を測る無袖の石室になっている。安部倉ダムの西に位置する緩斜面の丘陵上には，６基の円墳からなる塚原古墳群が知られている。この古墳群も横穴式石室を内部主体に有するが，玄室幅の計測値はいずれも約0.9$m$で，龍王塚古墳の南に位置する古墳や鳩ケ岩山の西山麓に所在する古墳群より




第２図　龍王塚古墳周辺遺跡分布図（1/25000）

も玄室幅のみならず全体の規模が小さい。安部倉ダムの堰堤の西には，農道の新設工事によって内部主体の箱式石棺が発見された小規模な古墳がある。さらに南東の道路や安部倉川を挟んだ地点に所在する舌状台地の先端部にも，内部主体が箱式石棺の小円墳1基が存在するが，詳細は不明である。横尾の集落の西に連なる急峻な丘陵には，横尾古墳群，長坂古墳群，湯舟谷古墳群などが確認されている。横尾古墳群には約50基の円墳が存在し，いずれも内部主体は横穴式石室である。長坂古墳群にも7基の円墳が存在し，横穴式石室が内部主体のものばかりである。湯舟谷古墳群には21基以上の古墳が確認されているが，森宮の集落が位置する沖積平野に面して舌状に張り出した丘陵尾根上に連なる4基の円墳だけは，内部主体が横穴式石室ではない。日近川流域の下高田の集落には，特に右岸の丘陵上に集中して古墳または古墳推定地が15か所以上も知られている。この地点に群集している古墳のなかには，全長約44$m$を測る前方後円墳で後円部に2基の竪穴式石室を有する尾籠山古墳（第2図の範囲外）のような特殊なものもある。

奈良時代や平安時代の遺跡は，綿密な分布調査が行われたにもかかわらず存在しない。

中世の遺跡として，奥毘沙門遺跡が確認されている。この遺跡には巨石の立ち並ぶ磐座や土壇群が数か所に認められるから，祭祀跡と推定されている。

横尾城跡は戦国時代に構築された山城であるが，詳細については不明である。

時期が断定できない特異な遺跡として，塚原製鉄遺跡が知られている。焼土や鉄滓が散布しているものの，遺跡の性格は明らかでない。

このように龍王塚古墳の周辺地域には弥生時代から戦国時代までの遺跡が存在するが，突出して多いのは龍王塚古墳と同じ形態や構造の横穴式石室を内部主体に有する古墳で，数基から約50基までのものが群集している。ところがいずれの古墳も龍王塚古墳の墳丘や石室の計測値よりもはるかに規模が小さいものばかりであるから，龍王塚古墳は周辺地域で最も傑出した古墳であることが認識されるのである。

**註**

（註1）岡山県教育委員会編「木造毘沙門天立像」『岡山県の文化財』(一)　岡山県教育委員会　1980年
（註2）岡山県教育委員会編「木造不動明王立像」『岡山県の文化財』(一)　岡山県教育委員会　1980年
（註3）岡山県教育委員会編「梵鐘」『岡山県の文化財』(二)　岡山県教育委員会　1981年
（註4）岡山市教育委員会文化課編『岡山市埋蔵文化財分布地図』　岡山市教育委員会　1983年
（註5）永山卯三郎著『岡山縣通史』上編　岡山県通史刊行会　1930年

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1.　**龍王塚古墳** | 2.　塚原古墳群 | 3.　横尾古墳群 | 4.　長坂古墳群 |
| 5.　湯舟谷古墳群 | 6.　塚原製鉄遺跡 | 7.　奥毘沙門遺跡 | 8.　横尾城跡 |

# 第２章　調査の契機と経過

## 第１節　調 査 の 契 機

新岡山空港は，航空機のジェット化時代に対応するため，岡山県が建設を計画している新空港で，部分的には建設工事が進行しつつある。

岡山市浦安に所在する現在の岡山空港は，昭和37年に開催された「岡山国体」を契機に建設されたもので，滑走路の延長は1,200ｍを測るにすぎない。したがって，現在では製造が中止されているＹＳ－11の国産プロペラ機を就航するのがやっとで，現存する空港のままでは早晩その機能を失うことになる。

岡山県は，昭和49年に岡山県空港問題研究会（座長・東京大学名誉教授今野源八郎）を発足させ，存続か否かを含め，将来の「岡山の空の足」の在り方について審議した。その結果，「ジェット化時代に即応した新空港が必要」との結論を得たため，岡山と倉敷の市街地から30㎞圏内の６候補地（現空港，岡山市日応寺，同三和，同宝伝，同十二本木山，御津郡建部町・御津町の田地子）について，適地調査が実施された。昭和53年11月になると「岡山市日応寺地区が最適」とされ，候補地が岡山市日応寺地区の１か所に絞られた。

日応寺地区は，国道53号線から県道栢谷山上線を北西に向けて入った地点に位置し，周辺一帯は起伏の比較的少ない高原になっている。新空港の建設計画によると，滑走路は2,000ｍ（将来は2,500ｍに延長も計画）で，エプロンやターミナル施設などを含めて約90万㎡の用地面積になるという（註１）。

この広大な面積を占める開発計画が策定された段階で，岡山県教育委員会は日応寺地区の遺跡分布状況を岡山市埋蔵文化財分布地図（註２）などで把握し，岡山市教育委員会の協力も得て新空港建設予定地のみならず周辺地域の広い範囲にわたって現地踏査を行った。その結果，滑走路が建設される新空港の中心地では，遺跡を確認することができなかったが，航空の安全確保のために設置しなければならない航空保安無線施設の建設予定地には，古墳１基と巨石が密集した祭祀遺跡推定地が存在することが判明した。

岡山県教育委員会は，岡山県企画部新空港建設室や岡山県新岡山空港建設事務所と遺跡の取り扱いについて協議したが，航空保安無線施設の位置は地理的条件に制約され，設計を変更して別の地点へ移すことが不可能であると判断されたため，事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

# 第2節　調査の経過

龍王塚古墳の発掘調査は，岡山県文化財保護審議会委員の3名を専門委員に委嘱し，御指導と御助言を得て，昭和58年8月8日から昭和58年11月14日まで実施した。調査現場の発掘作業では岡山県新岡山空港建設事務所及び地元有志の方々に御協力を得た。

この龍王塚古墳は，新岡山空港の航空安全確保施設建設予定地内に所在し，現状保存が困難であると判断されたため，記録保存の措置としてやむなく発掘調査を実施したのである。よって墳丘全体の解体を含めた，全面調査を行うことを計画した。巨石が密集した2か所の祭祀遺跡推定地の確認調査は，龍王塚古墳の発掘調査と並行して行うことにした。

龍王塚古墳の発掘調査は，地元住民による古墳周囲の大木や雑木の伐採作業が完了してから着手した。まず発掘調査に必要な基準点を設置し，調査実施前の地形測量を行った。その後の調査工程は，危険防止のために石室内の掘り下げや石室の前面に堆積した埋土内の遺物確認作業を先行させ，石室内の調査が完了してから墳丘の表土除去作業や周溝の検出作業に移行した。古墳が構築された当時の形態に最も近い状態で地形測量を再び行い，墳丘盛土の除去作業に着手した。すべての盛土を除いた段階で石室の石組状況を記録し，石室の掘形を調査した。

この龍王塚古墳は比較的規模の大きな古墳であるから，石室に使われている石を除去するのは極めて危険であると判断されたため，写真撮影や実測に支障のない限り，古墳が構築された当時の安定した石組状況でそのまま残すことにした。

**調査体制**

**専門委員**

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

**岡山県教育庁文化課**

早田憲治　課長

橋本泰夫　課長代理

吉本唯弘　課長代理

河本　清　課長補佐

遠藤勇次　主任

松本和男　文化財保護主査

岡田　博　文化財保護主査

浅倉秀昭　文化財保護主事

福田正継　文化財保護主事（調査担当）

中野雅美　文化財保護主事

**調査作業員**

圓堂遊喜栄，寺西粂夫，圓城文夫，時光庄一，三田俊夫，遠藤清，圓堂菊夫

秋山春子，松元春代，的場袖子，遠藤百合子，圓堂鶴子，圓城ヒツ，寺西利子，

秋山順子，遠藤貞子，的場絹子，圓堂初恵

**日　誌　抄**

8月8日　発掘調査に必要な器材の準備及び運搬するトラックの手配を行う。測量に必要な海抜高及び基準杭の確認をする。

調査現場への進入路の整備及び龍王塚古墳周辺の伐採範囲を拡張する。

9日　発掘調査に必要な器材の運搬を行い，休憩小屋テントを設営する。

祭祀遺跡推定地A・B両地点の調査前写真撮影を行う。

龍王塚古墳の調査前地形測量を行うため，基準杭とレベル杭を設定する。

10日　龍王塚古墳の調査前地形測量を行う。

祭祀遺跡推定地B地点の表土除去作業を行う。

11日　龍王塚古墳の調査前状況写真撮影を行い，転落した天井石を機械で除去する。

12日　土捨場を確保するため，広い範囲の伐採作業を行う。

16日　龍王塚古墳の表土及び根の除去作業を始める。

18日　龍王塚古墳の石室内掘り下げ作業と並行して，フルイによる堆積土内の遺物確認作業を行う。また羨道入口付近の斜面堆積土内の遺物確認作業も行う。

23日　龍王塚古墳の石室内全体の清掃作業を行い，全体写真や部分写真の撮影をする。

龍王塚古墳の石室内を実測するため，割付け作業を行う。

25日　龍王塚古墳の石室内の西側壁を実測する。

27日　祭祀遺跡推定地B地点の表土除去作業も行う。

29日　龍王塚古墳の石室内の東側壁を実測する。

31日　龍王塚古墳の石室内の奥壁部分と玄室入口部分を実測する。

9月1日　龍王塚古墳の石室内の天井石と玄室中央部の断面を実測する。

2日　龍王塚古墳の調査前全景写真撮影を行う。

龍王塚古墳の周溝検出作業及び周溝内埋土除去作業を行う。

祭祀遺跡推定地B地点の表土除去作業も行う。

3日　土捨場に排土が置けなくなったため，伐採作業を行って土捨場を拡張する。

5日　龍王塚古墳の墳丘表土面の清掃作業と，周辺部の表土除去作業を行う。

7日　龍王塚古墳の奥壁部分に位置する周溝の土層断面を，写真撮影を行って実測する。

12日　龍王塚古墳の周溝内の雨水処理を行ってから，墳丘全体の清掃作業に着手する。

13日　龍王塚古墳の墳丘測量を行う。

祭祀遺跡推定地A・B両地点の表土除去作業を行う。

14日　龍王塚古墳の墳丘や周辺の清掃作業を行い，全景写真を撮影する。

祭祀遺跡推定地A地点の表土除去作業を行う。

16日　龍王塚古墳の墳丘盛土の除去作業を始める。

17日　龍王塚古墳の墳丘盛土土層断面の実測準備を行う。

19日　龍王塚古墳の墳丘盛土土層断面を実測する。

23日　龍王塚古墳の墳丘盛土土層断面を写真撮影する。

24日　龍王塚古墳の土層断面観察用畦の除去作業を行う。

26日　龍王塚古墳の墳丘盛土除去後の石室全体写真撮影を行う。

28日　本日より当分の間，農繁期のために現場作業を中止する。

30日　専門委員水内昌康氏が来跡され，現地指導を受ける。

10月1日　専門委員近藤義郎氏が来跡され，現地指導を受ける。

3日　専門委員鎌木義昌氏が来跡され，現地指導を受ける。

11月1日　本日より龍王塚古墳の発掘調査作業を再開し，天井石上面の写真撮影を行う。

2日　龍王塚古墳の天井石上面の実測をするため，割付作業を行う。

3日　祭祀遺跡推定地A・B両地点の清掃作業を行い，調査後の全景写真を撮影する。

4日　龍王塚古墳の天井石上面を実測し，石室掘形の底部を検出する。

5日　龍王塚古墳の石室掘形を実測し，実測図面の補足を行う。

10日　発掘調査に使用した道具を，調査現場から運搬に便利な場所へ移動する。

12日　発掘調査に使用した道具を水洗いし，持ち運びが容易なように整理する。

14日　発掘調査に使用した道具を岡山市西古松の文化課分室へ運搬し，龍王塚古墳の発掘調査を終了する。

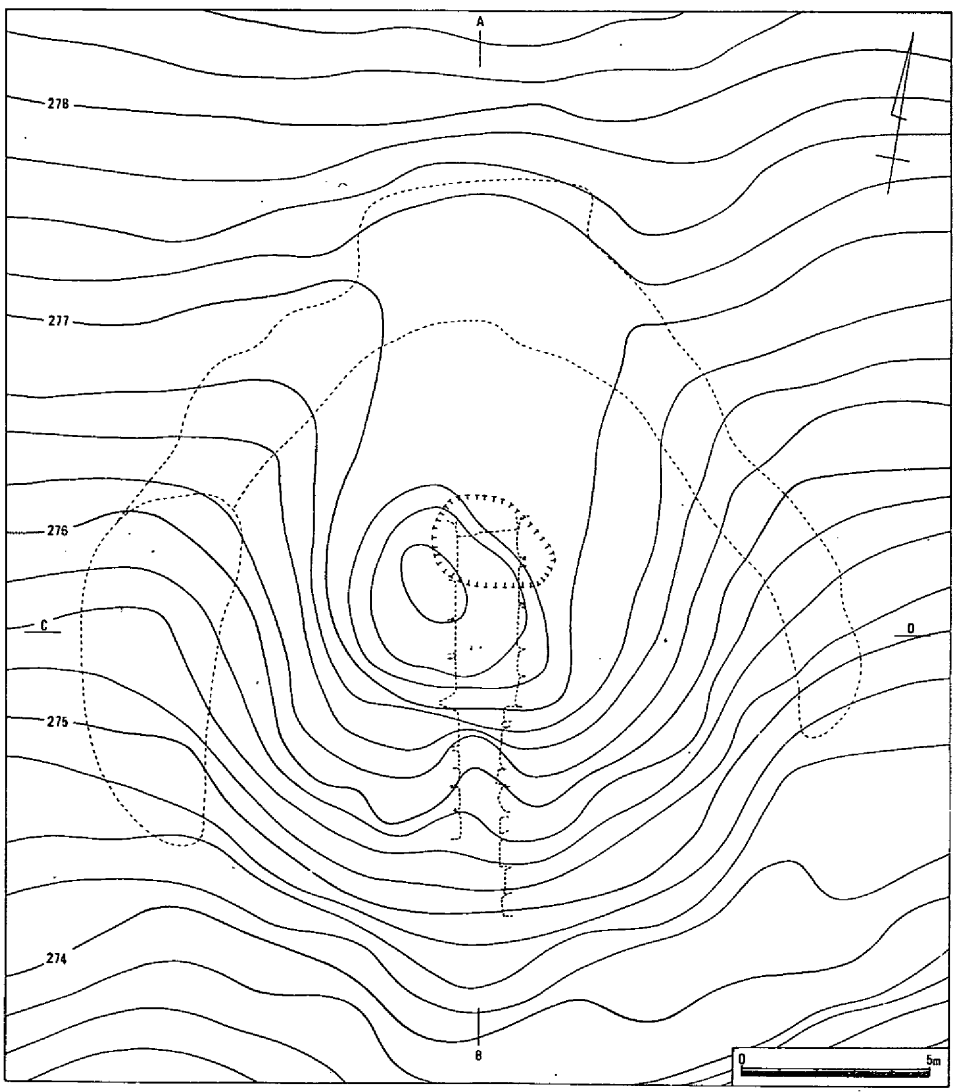
註

（註1）大田弘之「新岡山空港」『岡山県大百科事典』上　山陽新聞社　1980年

（註2）岡山市教育委員会文化課編『岡山市埋蔵文化財分布地図』　岡山市教育委員会　1983年

# 第３章　古墳の立地状況と調査前の概観

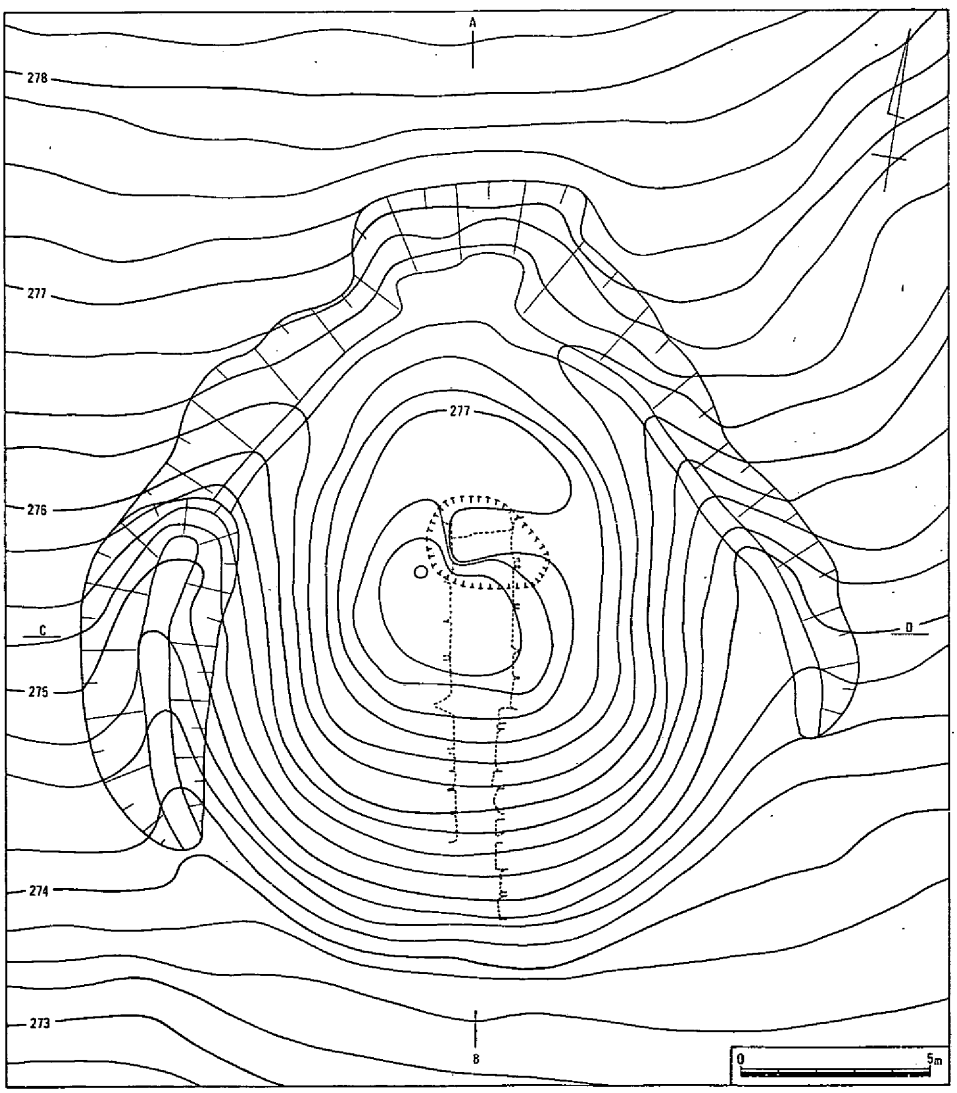
龍王塚古墳が立地した地点は，杉谷，安部倉，新田，面室などの集落に囲まれた海抜292$m$を測る丘陵で，頂部からわずかに南側に下った緩斜面に位置していた。眼下には，安部倉川の流域に開墾された狭くて階段状を呈する谷水田が細長く連なって認められるものの，可耕地が極めて少ない谷地形になっている。




第３図　龍王塚古墳調査前墳丘測量図（1/200）

龍王塚古墳の所在地まで行くには，安部倉の集落を抜けて尾根上に登り，「備前」と「備中」の国境になっていた細い山道を南に向かって約700mも奥深く入らなければならなかった。発掘調査に着手する以前に現地を訪れたのであるが，古墳の周辺には太い赤松や多くの雑木が複雑に繁茂していたため，近くまで辿り着いたにもかかわらず，龍王塚古墳そのものを探し出すことは極めて困難であった。

龍王塚古墳はほぼ南に向かって開口した横穴式石室を有する古墳で，周辺地域では最も規模が大きく，盗掘を受けて一部が崩壊していたものの，残存状態は比較的良好であった。この古墳が所在した丘陵全体を丹念に精査したが，龍王塚古墳に近接した地点には古墳は認められ




第4図　龍王塚古墳墳丘測量図（1/200）

ず，南に遠く離れた位置の丘陵裾部に2基の古墳が存在するだけであった。

龍王塚古墳の奥壁部分は，天井石や側壁の一部が露出して，人間が入ることができる大きな穴が存在した。また南に面した石室の入口付近には，天井石と推定される大きな板石や羨道部分の側壁に使用した石材が転落していた。この石室の入口付近にも，人間が腹這いになってやっと入ることができる空間が認められ，天井石の架設状態や石室内の石組み状況を観察することが可能であった。構築当時の位置を保持して残存する天井石は4枚で，奥壁部分と羨道部分の天井石は欠如していた。石室の側壁はわずかに「持ち送り」を呈し，天井石と接する部分には，比較的小さい石を使用して空間が生じないようにしていた。石室内の玄室入口周辺では，天井石に接する付近まで土砂が厚く堆積していた。羨道部分には天井石が転落して存在しなかったこともあって，側壁の石材が露出して内部に土砂が流入していた。

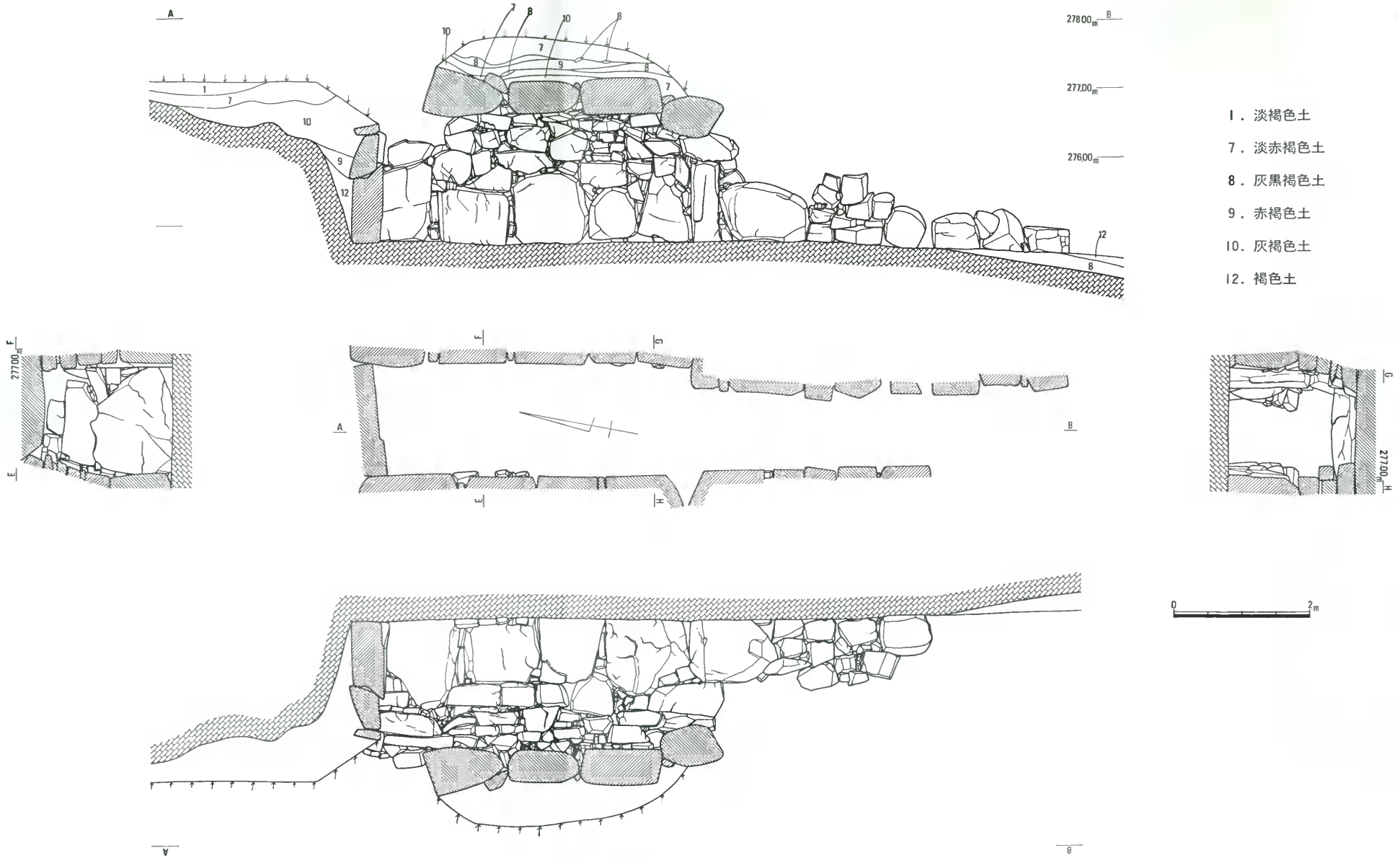
龍王塚古墳の墳丘盛土の残存状態は，奥壁部分と玄室入口部分の天井石の一部が露出していたものの，比較的良好で墳頂部の地点では天井石の上面に約60㎝を測る厚さになっていた。墳丘の頂部付近には，近年になって掘り込まれたと推定される小規模で浅い窪地が2か所に認められた。龍王塚古墳の北西方向に位置する緩斜面には，地権者の違いを示す境界の溝が直線的に存在した。

龍王塚古墳の墳丘端部は，地形の高い部分の奥壁に面した北側を除いて明瞭ではなかった。北側の奥壁に面した部分には，周溝と思われる痕跡が認められ，緩やかな帯状の曲線を描いた浅い窪地が残存していた。その地形の残存状況から判断して墳丘の規模を推察すれば，直径が17ｍから20ｍになると考えられた。墳丘の東西両方向の部分には，周溝と判断できるものは確認できなかったため，墳端を確実に把握することが不可能であった。墳丘の端部になると推定される部分には，墳丘の盛土が流失したと思われる土砂が堆積していた。石室の入口に面した南側は，転落した天井石や羨道の側壁に使用されていた石材が散乱していた。この位置は地形の低い部分に相当したため，墳丘の盛土と自然地形の斜面との区別が極めて困難であった。

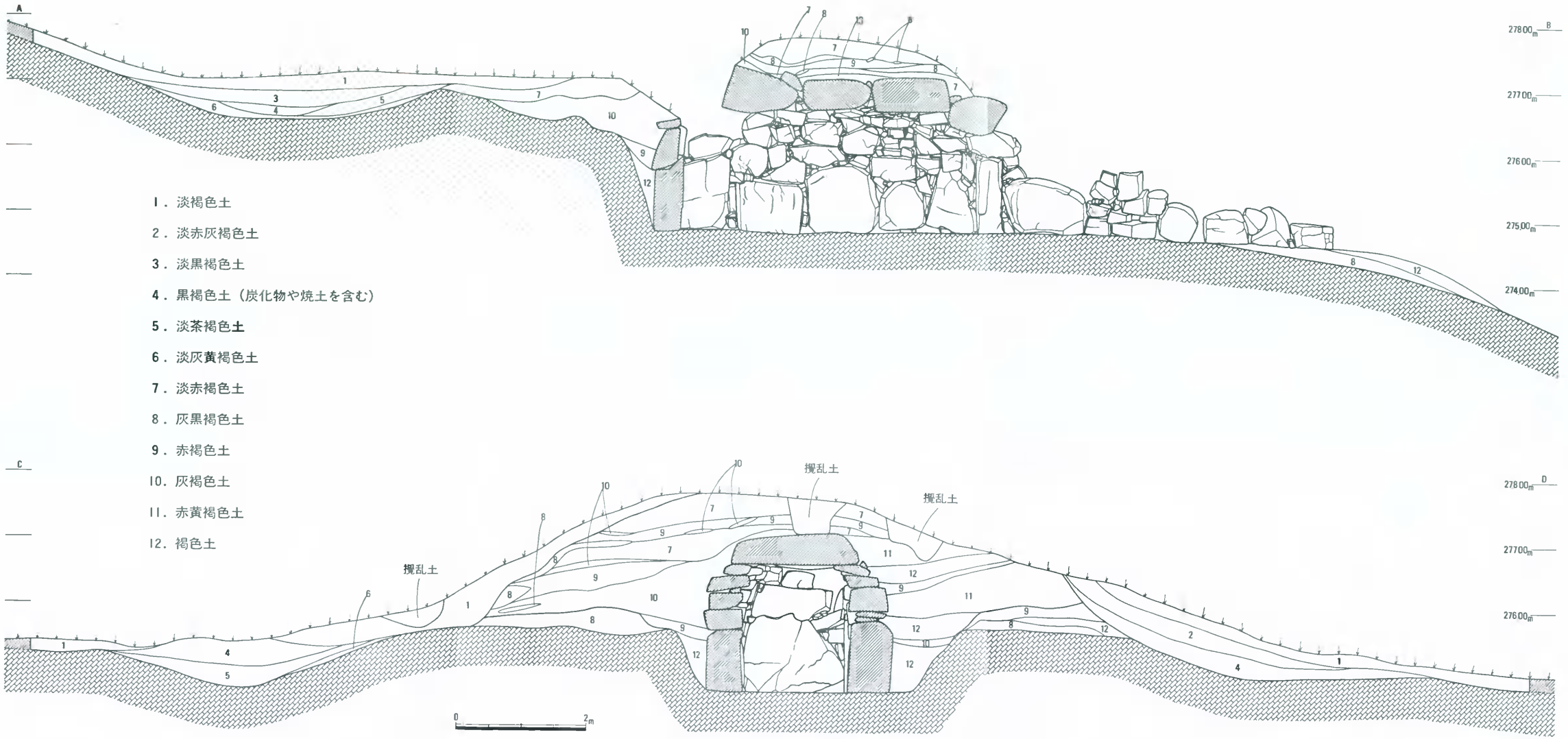
石室の入口に面した南側の斜面には，新田や面室の集落から龍王塚古墳の所在した丘陵頂部に通じる細い山道が存在したが，地元の人達の話によるとこの山道は明治時代以降に造られたもので，この古墳に伴う墓道を踏襲しているものではないと考えられた。発掘調査に着手する以前に現存した周囲の地形を踏査したが，龍王塚古墳には墓道は存在しないであろうと判断された。また前庭部のような外部施設についても，存在するとは思われなかった。

この龍王塚古墳は，地形の低い石室の入口に面した南方向から見ると墳丘が著しく高いように錯覚するが，奥壁に面した北方向で測量すると，残存した高さは約1ｍ20㎝であった。

このように調査に着手する以前に概観した龍王塚古墳は，直径が17ｍから20ｍを測る比較的規模の大きな横穴式石室を有する円墳で，残存状態は極めて良好であると判断された。




第5図　龍王塚古墳石室実測図（1/60）




第6図　龍王塚古墳断面図（1/60）

# 第4章　発掘調査の概要

## 第1節　墳丘と外部施設

発掘調査に着手する以前に概観したように，奥壁部分と羨道部分の天井石は欠如し，構築当時に架設された位置に残存していた天井石は4枚であった。墳丘の頂部付近には，盗掘によって生じたと推定される浅い窪地が2か所に認められたが，墳丘の残存状態は比較的良好で，天井石の上面に約60㎝を測る盛土が行われていた。地形の低い東西両側から石室の入口に面した南側にかけては，墳丘の盛土が流失したと思われる土砂が堆積し，墳端を確実に把握することが困難であった。

### 墳丘

龍王塚古墳の墳丘の中心で直交する土層断面観察用の畦を設定して，盛土の堆積状態を調査したのであるが，現状保存が不可能な古墳であったため，墳丘全体を解体して写真撮影や実測を丹念に行った。

天井石の上面には，表土直下に淡赤褐色土または赤褐色土が，灰黒褐色土または灰褐色土と何層にも帯状に重なって版築状を呈していた。淡赤褐色土や赤褐色土は粘土質の土砂で，水分を含んで粘着性に富んでいた。灰黒褐色土や灰褐色土には灰が意図的に混入され，堅く叩きしめられていた。墳丘の東側や奥壁の根石と掘形の間には，比較的粘着性の強い褐色土が認められた。墳丘盛土の下位に位置した地山面は，古墳を構築する以前の段階で表土面が整地されたことが推定され，腐植土を除去して堅牢な灰黒褐色土を貼り付けていた。その上位には，帯状になった版築状の堆積が認められたのであるが，構築段階に応じて墳丘の盛土が行われたことが考えられた。すなわち規模が大きくて安定している根石を配置した時に，石室の掘形と根石の間に生じた空間に褐色土を埋め，さらに上位に石材を積み上げるにしたがって，赤褐色土や灰褐色土を交互に重ねていたのである。墳丘の斜面部分には，盛り上げた墳丘が崩壊しないように，表面の堅い灰黒褐色土を貼り付けていた。石室を構築しながら墳丘を整形する過程では，石室内に空間が存在すれば，周囲に盛り上げられた土の圧力で側壁や奥壁が内側に崩れてしまうことが想像されるから，すべての天井石を架設して墳丘全体の整形作業が完了するまで，石室内には土砂が詰められていたと考えられる。龍王塚古墳全体の築造作業が完了して遺骸を埋葬する前段階に，石室内に詰められていた土砂が除去されたのではなかろうか。

### 周溝

龍王塚古墳の発掘調査に着手する以前に，古墳の所在した現地を訪れたのであるが，地形の高い奥壁の北側斜面に，周溝の痕跡が残存しているのが認められた。ところが東西両側の部分と石室の入口に面した南側斜面では，流出した墳丘の盛土が堆積して，周溝の痕跡が把握できなかった。

墳丘の盛土の調査と並行して，周溝全体の痕跡を追求した。その結果，石室の入口に面した南斜面を除いて，「馬蹄形」を呈する周溝を墳丘の端部に検出した。

奥壁に面した地形の高い北側部分では，検出面での幅が1m70cmから3m80cmを測り，断面形は浅い「U」字形を呈していた。この地点の周溝は，約6mの幅にわたって北側に面した地形の高い方向へ拡張され，部分的に隅丸方形を呈する土壙状になっていた。周溝の最も高い位置の底部は海抜約276m40cmの位置で，淡灰黄褐色土，淡茶褐色土，炭化物や焼土を含む黒褐色土，淡黒褐色土が堆積していた。底部の直上に認められた淡灰黄褐色土内からは，須恵器の大甕の破片（**30**）が比較的多く出土した。この須恵器の大甕の破片は同一個体のもので，意図的に破損された状態であった。炭化物や焼土を含む黒褐色土内からは，平安時代の土師器と推定される土器片（第19図）が出土した。

東側で確認した周溝の痕跡は，検出面での幅が1m70cmから2m70cmを測り，断面形は上位に大きく開いた浅い「U」字形を呈していた。この周溝の痕跡は海抜約274m50cmの地点までは確認できたものの，その位置より地形の低くなった部分では，精査したにもかかわらず周溝を検出することができなかった。東側で確認した周溝の端部も，幅がわずかに広くなって底部に浅い段が認められる土壙状を呈していた。溝内には炭化物や焼土を含む黒褐色土と淡赤褐色土が堆積し，溝の底部に接して須恵器の大甕の破片を検出した。この大甕の破片は，奥壁に面した地形の高い北側部分から出土したものと同一個体であった。土層断面を観察するために設置した東西方向の畦の位置では，周溝部分の炭化物や焼土を含む黒褐色土内から，平安時代と推定される土師器の破片（第19図）に混在して，金銅製の耳環（**94**）が1点だけ出土した。したがってこの龍王塚古墳は，平安時代の時期にすでに盗掘されていた可能性が強い。

西側で検出した周溝の痕跡は，北側や東側のものとは状態が著しく異なっていた。すなわちほぼ中央部分から地形の低い方向の斜面にかけて，周溝そのものが深く掘り窪められた細長い土壙状を呈しており，検出面での最大幅が約4mになっていた。この土壙状を呈した部分には，淡茶褐色土と炭化物や焼土を含む黒褐色土が堆積し，断面が浅い「U」字形を呈していた。海抜約274m10cmより低い位置では，東側の地点と同様に周溝の痕跡が存在しなかった。西側で確認した周溝の底部からも，北側や東側で採集した須恵器の大甕と同一個体の破片が比

較的多く出土した。平安時代の土師器と推定される土器片（第19図）も炭化物や焼土を含む黒褐色土内から出土したが，北側や東側と比較すると出土した量は極めて少なかった。

なお石室の入口に面した南側斜面では，周溝の痕跡は存在しなかった。

このように検出した周溝の痕跡から龍王塚古墳の規模を推定すれば，直径が約17mの比較的大きな円墳になるであろう。

**前庭部・墓道・閉塞施設**

石室の入口に面した南側の斜面で，龍王塚古墳に伴う前庭部や墓道と，埋葬が終了した段階に石室を封鎖する閉塞施設について調査したが，いずれも検出することができなかった。龍王塚古墳が所在した立地状態から判断して，前庭部や墓道は構築された時点から存在しなかったと考えられた。また閉塞施設については，龍王塚古墳が平安時代の時期にすでに盗掘された可能性が強いから，閉塞施設が盗掘された時に破壊されたのか，あるいは構築された当初から施設そのものが存在しなかったのか，精査したにもかかわらず断定することができなかった。

## 第2節　石室の掘形

龍王塚古墳の発掘調査では，墳丘の盛土をすべて除去したこともあって，石室の掘形の全容を把握することができた。

石室の掘形の平面形は，玄室部分を中心にしてほぼ隅丸長方形の形態を呈していた。地形の低い南斜面に位置した羨道部分には，掘形の痕跡が認められず，灰黒褐色土や褐色土を貼り付けて床面を形成していた。

掘形の奥壁部分での幅は，検出面で約4m30cm，床面で約2m50cmになっていた。土層断面を観察するために設定した東西方向の畦の部分での掘形の幅は，検出面で約4m40cm，床面で約3m20cmになっていた。石室の掘形の断面形は逆台形を呈し，側壁や奥壁の根石との間に褐色土が埋められていた。掘形の検出面から床面までの深さは，奥壁の北側で最高値の約1m40cmを測り，地形の低い南側に移行するにしたがって浅くなり，羨道部分では掘形そのものの痕跡が不明瞭になっていた。掘形の床面はほぼ水平で，海抜約274m70cmの高さになっていた。

龍王塚古墳の石室は，掘形に対してわずかに西側に偏在するように構築されていた。西側の側壁は掘形の法面に接して構築されていたが，東側の側壁は法面との間に空間が生じていた。

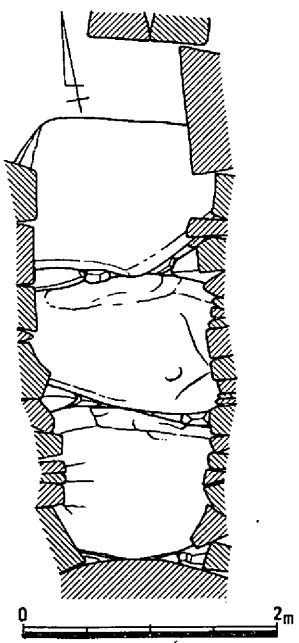
石室と掘形の位置が，なぜずれているのであろうか。想像たくましくあえて推察すれば，奥壁に安定した根石を設置した後に，掘形に接して西側の側壁から構築したため，東側の側壁は西側の側壁の配置に規制されて空間が生じてしまったのではなかろうか。

# 第3節　石室の構造

龍王塚古墳の石室の形態は，ほぼ南方向に開口した片袖を有する比較的大きな横穴式石室であった。石室の主軸方向はN-10.0°-Wを示し，掘形の西側にわずかに偏在して構築され，石室の主軸線と掘形の中心線がややずれていた。この龍王塚古墳の石室は，奥壁部分と羨道部分の天井石が欠如していたものの，残存状態は比較的良好であった。

石室の構築に使用されていた石材は，龍王塚古墳の所在地周辺で産出していた花崗岩の自然転石と考えられた。奥壁や側壁の根石には，原則として大型で安定した石材を用い，上段にはやや小型の石材を使っていた。構築作業の段階で生じた隙間には，花崗岩の小割石を充填していた。龍王塚古墳の玄室部分の側壁は，床面からわずかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態になっていた。石室内の壁面には，粘土等による目張りや赤色顔料塗布等の痕跡は認められなかった。

遺存状態が良好であった東側壁の床面を基準に石室の残存長を計測した結果，玄室約4m50cm，羨道約5m50cmの延長約10mであった。石室の入口に面した羨道部分が崩壊していた可能性も否定できないから，構築された当時の規模はさらに大きくなるかもしれない。石室の床面での幅は，玄室約1m60cm，羨道約1m10cmで，片袖が存在したから，玄室が約50cmだけ広くなっていた。床面から天井石までの高さは，玄室約1m80cm，羨道約1m50cmになっていたが，羨道に残存した天井石は，玄室との境界に位置した1枚だけであったから，入口に面した羨道部分の天井石までの高さは不明であった。



第7図　石室内天井石（1/60）

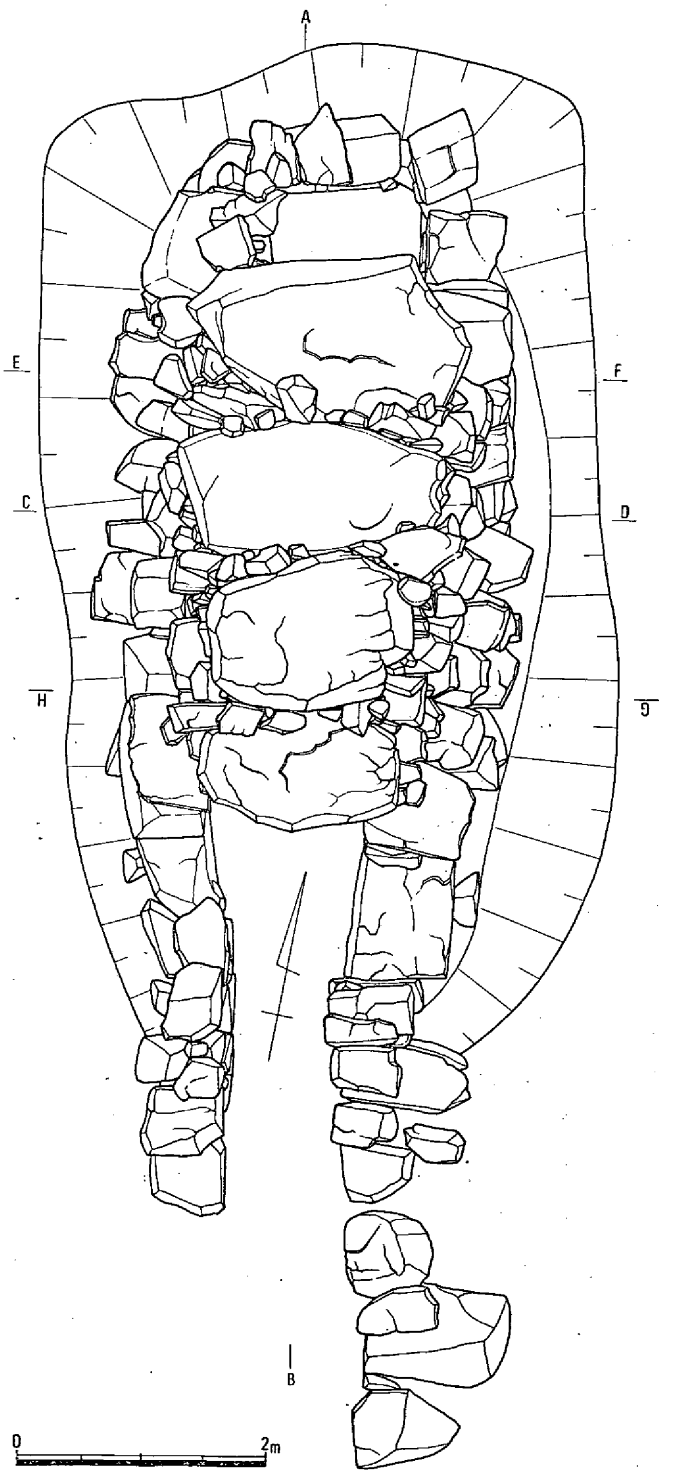
石室の入口に面した南斜面の羨道部分は，灰褐色土と褐色土を貼り付けて平坦で堅牢な床面を造成し，その床面の上に側壁の根石を据えていた。掘形の法面と奥壁や側壁の間には，版築状の土層が認められたものの，石材を安定させるために支える控え積み石は，使用していなかったようである。

なお石室を構築するのに使用された石材について特筆すべきことは，石室内の壁面が平坦な面になるように，石材の面を部分的に削って二次的な手を加えていたことである。特に側壁の根石の上面に存在した比較的大きな石材に顕著で，石室内の石材の表面に工具の痕跡が残存していた。

### 奥壁

龍王塚古墳の奥壁の部分は，盗掘を受けていたこともあって，天井石の1枚が石室内に転落していた。この古墳の石室は片袖を有する横穴式の石室であったから，玄室よりも羨道の幅が約50㎝も狭くなっていたので，石室内に転落した天井石を羨道方向へ移動して，石室の入口から持ち出すことは不可能であった。また天井石が転落して奥壁部分に生じた空間が狭かったため，天井石の除去作業は著しく困難であった。この危険でもある作業は，2本の丸太の支柱と1台のチェーンブロックに2台のチルホールを併用して行い，奥壁部分の狭い空間から天井石を吊り上げて，周溝より約15㎞も外側へ移動した。

龍王塚古墳の奥壁の根石は，石室の幅に見合うだけの巨大な1個の石材を，広口に立てて据えていた。この根石の大きさは，高さ約1㎞20㎝，厚さ40㎝から45㎝で，上位に幅約50㎝を測




第8図　龍王塚古墳石室平面図（1/60）

る長方形の石材を広口にして積んでいた。天井石に近接した位置には，西側部分にさらに2個の石材を並べて横口積みにしていた。東側の天井石に近接した部分は，盗掘によって壁面が崩壊し，石材が石室内に転落していた。側壁との隙間は，割石の小石材を何段にも小口積みにして塞いでいた。特に東側壁に面した部分には，広い空間が生じたため，比較的大きな石材を使用していた。ところが東側壁に面した根石と床面の間は，隙間が認められたにもかかわらず，石材は存在しなかった。

龍王塚古墳の奥壁は，床面に据えた巨大な根石そのものの表面が凹凸で，さらに上位に別の石材を積み上げていたために，壁面が平坦に揃っていなかったが，構築過程で生じた隙間に割石の小石材をうまく補っていたので，比較的堅牢な構造になっていた。

### 玄室の東側壁

龍王塚古墳の玄室の東側壁は，奥壁に面する天井石に近接した部分が，盗掘によって部分的に崩壊していたものの，構築された当時の形態をよく残していた。羨道との境界には「袖」が存在し，1辺約40cmで高さ約1m20cmを測るほぼ立方体の安定した石材を，約50cmも石室の内部に張り出して据えていた。

玄室の東側壁には，5個の根石が認められた。奥壁に接していた根石は床面から約1m15cmを測り，奥壁や袖に据えられた石材とほぼ同じ高さになっていた。この根石の上位には，鋭利な角を有する細長くて比較的大きな石材を横口積みにしていた。さらにその上方の天井石に接する部分は，盗掘によって壁面が崩壊し，石材が石室内に転落して存在しなかった。南側に並べられた4個の根石は，大きさや形が不揃いになっていた。床面からの高さは80cmから95cmを測り，石室内の面は長方形や三角形に近い形態を呈するものも認められた。これらの根石の間には，割石を小口積みにして隙間を塞いでいた。4個の根石の上面は高低差があって不揃いだから，大きな石材と小さな石材をうまく配置し，強固で安定した壁面を構築していた。なお大きな石材は横口積み，小さな割石は小口積みにするのを原則にしていた。天井石が架設された最上段には，割石の小石材を多く使用していた。

このように玄室の東側壁は，奥壁に面した天井石に接する部分が崩壊していたものの，全体として構築された当時の形態をよく残し，強固で安定した構造を呈していた。

### 羨道の東側壁

龍王塚古墳の羨道の天井石は，玄室との境界に1枚だけが残存した。石室の入口に面した南側は，側壁までも崩壊していたから，天井石は存在しなかった。この古墳が構築された当時に，羨道に架設されていたと思われる天井石は，石室内の羨道部に転落していた2枚と，南西

部分の墳端に散在していた2枚を確認しただけである。現存した羨道の規模と天井石の大きさから推定して，少なくとも別に2枚以上の天井石が必要であると考えられたが，古墳が所在した地点の南斜面付近を精査したにもかかわらず，見つけることができなかった。

羨道のほぼ中央から石室の入口に面した南側では，斜面に灰褐色土や褐色土を貼り付けて床面を造成し，その上に側壁の根石を据えていた。羨道の東側壁の構造は，前述した玄室の東側壁とは異なり，根石に人頭大の比較的小規模な石材も使用していた。その地点は，さらに上面に同じような石材を横口積みにしていたが，石材の間に隙間が多く認められ，極めて不安定な様相を呈していた。この側壁で最も大きな根石は，袖に面した位置に存在した。この根石の大きさは，床面からの高さが約85㎝を測り，石室内の面が約1㎡30㎝の幅になっていた。この巨大な根石の上位には，壁面が崩壊して石材が存在しなかった。袖に面した北側には，立方体の石材との間に細長い三角形の空間が生じていたが，2個の割石を詰めて塞いでいた。石室の入口に面した南側は，根石だけが残存して上位の石材が存在しなかった。羨道の東側壁の根石は，玄室との境界の袖から南側へ延長約5㎡50㎝の地点まで残存していたが，構築された当時の構造は，さらに南側へ側壁が張り出していたのかもしれない。これらの根石の間には，隙間が多く認められたが，割石の小石材は詰めていなかった。

このように羨道の東側壁は，天井石や上位の壁面が崩壊し，残存していた根石の間には空間が多く認められ，全体として粗雑で不安定な様相を呈していた。

**西側壁**

龍王塚古墳の西側壁には，袖が存在しなかった。羨道の天井石や上位の壁面は崩壊して残存しなかったが，玄室の側壁は奥壁部分の天井石が石室内に転落していたにもかかわらず，構築された当時の構造をよく残していた。西側壁の根石は，奥壁から南方向に延長約8㎡まで認められたが，さらに南方向に位置する石室の入口に面した羨道部分は，根石そのものが南西斜面の墳端に転落して存在しなかった。

龍王塚古墳の西側壁の玄室部分には，4個の巨大な根石が広口にして据えられていた。これらの根石の間には，割石材を詰めて隙間を塞いでいた。根石の床面からの高さは90㎝から1㎡30㎝を測り，中央に位置した2個の根石が両端よりも低くなっていた。この低くなっていた部分には，上位に石室内の表面が正方形または長方形を呈した比較的大きな石を，横口積みにして並べていた。さらに上位については，やや規模の小さな石材を横口積みにして数段に重ね，石の間に生じた隙間には，小石材を小口積みにして詰めていた。西側壁に使われた石材は，床面から上位に移行するにしたがって小さくなっていた。最上位の天井石に接する部分は，割石の小石材を小口積みにしていた。奥壁と接する地点の上位には，比較的細長い石材を積み重ね

て並べ，空間が生じないように考慮されていた。奥壁から2番目の根石は，床面との間に4個の割石を詰めていた。

羨道部分の西側壁は残存した天井石が1枚だけであったから，上位の壁面が崩壊して石材が存在しなかった。玄室との境界に位置した根石は，羨道部分では最も巨大なものであった。北脇の根石との間には広い空間が認められたが，この部分だけは石材を充塡していなかった。この空間の上位には，石室内の面が約50cm×1m10cmの細長い石材を，2個の巨大な根石を跨ぐようにして，横口積みに据えていた。残存した羨道の西側壁で中間に位置した部分は，比較的小さな割石を積み重ねていたから，玄室の壁面の構造と比較すれば，極めて粗雑で不安定な状態になっていた。

このように西側壁の玄室部分は，奥壁部分の天井石が石室内に転落して存在しなかったにもかかわらず，構築された当時の強固で安定した構造がよく残っていた。西側壁の羨道部分は，東側壁と同様に上位の壁面が崩壊し，石材が存在しなかった。

### 天井石

龍王塚古墳の天井石は，巨大で重い偏平な石が4枚だけ残存していた。

奥壁部分の天井石は，石室内に転落していた。したがって古墳が構築された当時には，玄室部分に4枚の天井石が架設されていたと考えられる。玄室部分の天井石の間に生じた隙間は，割石の小石材で念入りに塞いだ後に，墳丘の盛土を施していた。

羨道部分の天井石は，玄室との境界に1枚だけが残存していた。羨道部分に架設されていたと推定される天井石は，石室内と墳丘端部に4枚が散在していたが，羨道の規模と天井石そのものの大きさから考えると，別に2枚以上の天井石が必要であると考えられた。したがって構築された当時には，羨道部分に少なくとも7枚の天井石が架設されていたのではなかろうか。

## 第4節　古墳の構築過程

龍王塚古墳の発掘調査では，墳丘の盛土を完全に除去したこともあって，古墳の構築過程を把握することができた。発掘調査によって得られた知見に基づいて，龍王塚古墳が構築された作業行程を復原してみたい。

まず古墳を構築する場所の選定が行われ，地理的な立地条件や構築作業の効率などが考慮されて位置が決定すると，石室の掘形を掘り窪めたと考える。この作業で生じた土砂の一部は，地形の低い斜面に貼り付けて，石室の入口に面した羨道の床面を造成したであろう。なお掘り窪められた掘形の大きさは，継続して構築作業を進める石室の規模を規制することになる。

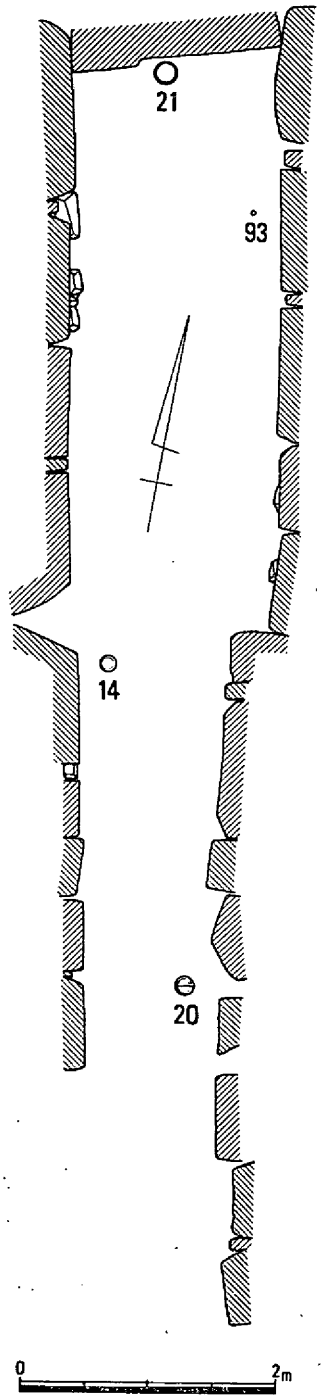
掘形が仕上がって床面が整備されると，最初に奥壁の巨大な根石が据えられる。さらに奥壁に接する両側壁の根石を，両脇から奥壁を挟むようにして立てたであろう。奥壁の根石は，巨大な石材が1個だけであったから，奥壁部分に最初に据えられた根石そのものの大きさは，玄室の幅を決めることになる。龍王塚古墳の西側壁は掘形の法面に接して構築されていたが，東側壁は法面との間に空間が認められた。したがってこの古墳の側壁は，西側壁から根石を掘形に接して配置したため，東側壁は西側壁が定まった後にその形態に規制されて必然的に構築されたと考える。奥壁や側壁の構築作業は，根石から天井石に接する部分まで墳丘の盛土作業と並行して連続的に行われたと推定されるが，側壁の石材そのものを並べたり積み重ねたりする順序には，一定の規則性が認められた。

玄室に配置された東側壁の根石は，まず奥壁に接して巨大な石を据え，また羨道との境界地点の袖に，ほぼ立方体を呈する高さ約1m20cmを測る石を設置していた。その後は，袖の位置から北に向かって3個の巨大な石を並べ，石の間には小石材を詰めていた。奥壁から2番目の石は，最後に据えられた根石で，両脇に生じた比較的広い空間は，割石の小石材によって塞いでいた。これらの根石の上位には，袖の位置に立てた立方体の石の高さまで，やや小規模の石を横口積みにして置いていた。さらに上位の海抜約276m20cmの壁面は，奥壁に面した北から南に向けて順番に石を並べていた。天井石に近い部分の壁面には，割石の小石材が多く認められ，石材を積み上げる順序は複雑であった。

羨道の東側壁は，袖に立てられた立方体の石に接して巨大な石を据えると，石室の入口に基準となる石を設置したようである。その後は，石室の入口に面した南から北に向けて順番に根石を並べ，最後には比較的小規模の割石を積み重ねて壁面を整備していた。

西側壁には袖が存在しなかったこともあって，壁面を構築する順序が東側壁とは異なっていた。奥壁に接して巨大な石を立てると，奥壁から4番目の玄室の南端に位置する根石を据えていた。さらに奥壁から3番目と2番目の根石を並べて玄室の基礎ができると，奥壁から5番目の根石を羨道の北端に据えていた。石室の入口に面した壁面は，崩壊して石材が存在しなかったが，玄室に連続して残存した壁面の状態から推定すると，前述した東側壁の羨道部分と同じように構築されたと考える。玄室と羨道の境界に位置する根石の上位には，比較的大きな石を2個の根石に跨がるように横口積みにしていた。さらに玄室の中央部分には，奥壁に接して立てられた巨大な石の高さまで，4個の石を奥壁に面した北から南に向けて順番に並べていた。奥壁に接した天井石の下位は，細長くて偏平な割石を積み重ねて強固にしていた。

奥壁や側壁が完成すると，天井石が架設されたのである。天井石が残存した玄室部分は，羨道に面した南から北の奥壁に向けて順番に並べていた。天井石の間の隙間を小石材で塞ぐと上面に大量の盛土を行い，半円球形に墳丘の形を整えて古墳の構築を完成させたであろう。




第9図　遺物出土状況（1/60）

## 第5節　遺物の出土状況

龍王塚古墳は奥壁と羨道の部分に架設されていた天井石が転落し，すでに盗掘を受けて石室内部が著しく撹乱されていた。したがって石室内から副葬された当時の状態で出土した遺物は極めて少なく，須恵器（**14・20・21**）と耳環（**93**）の4点を確認したにすぎない。ほとんどの遺物は，石室の入口に面した南斜面の堆積土中からフルイによって見つけたものである。土器や鉄器は破損していたものが多く，遺物の確実な個体数は不明であった。

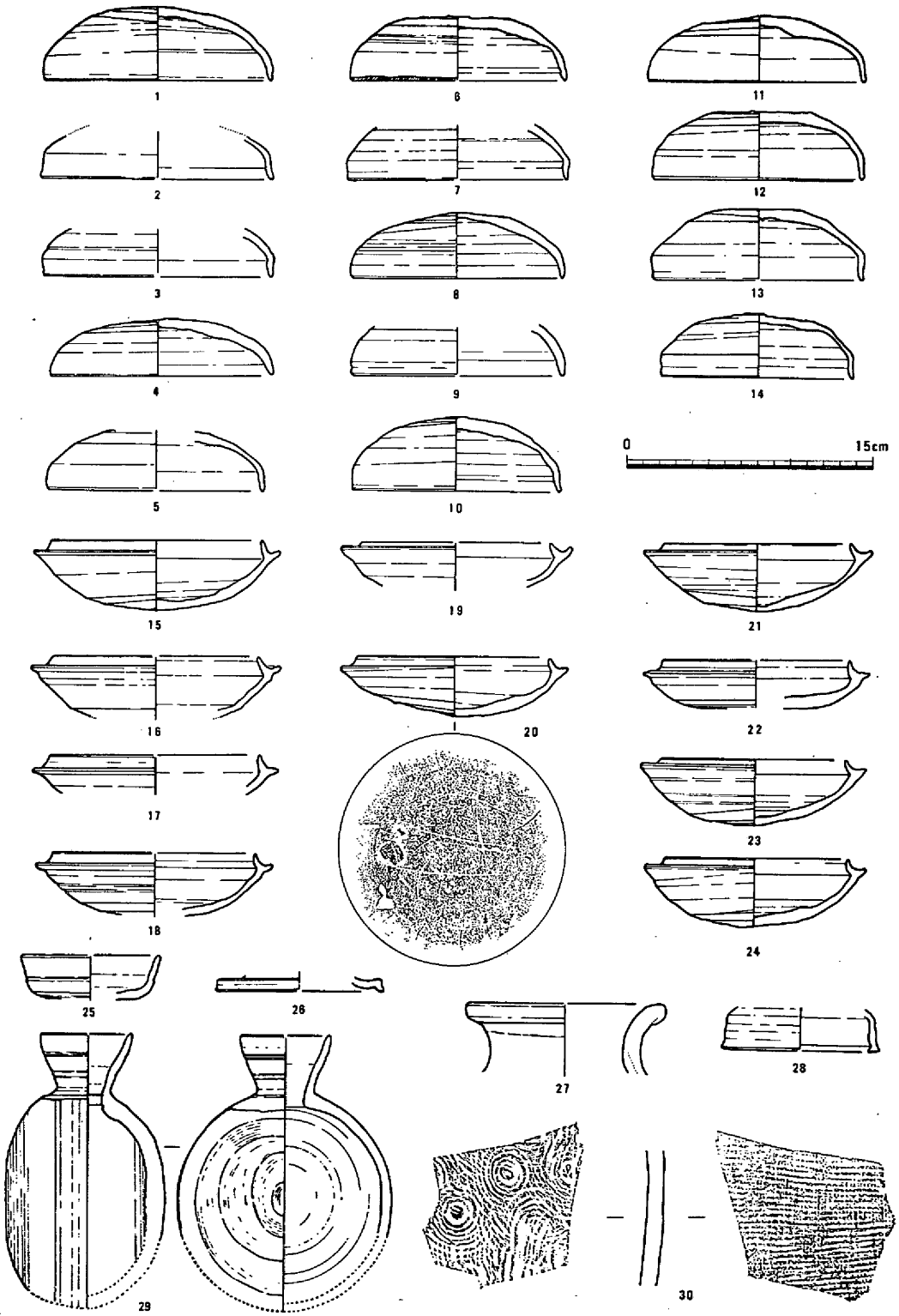
周溝内から出土した遺物に，須恵器の大甕片（**30**）と耳環（**94**）がある。前者は同一個体の破片と考えられるものが普遍的に数多く認められ，意図的に破損された可能性が強かった。後者は平安時代と推定される土師器の破片（第19図）に混在して出土したもので，龍王塚古墳が平安時代の時期にすでに盗掘されていたのではなかろうか。

## 第6節　出　土　遺　物

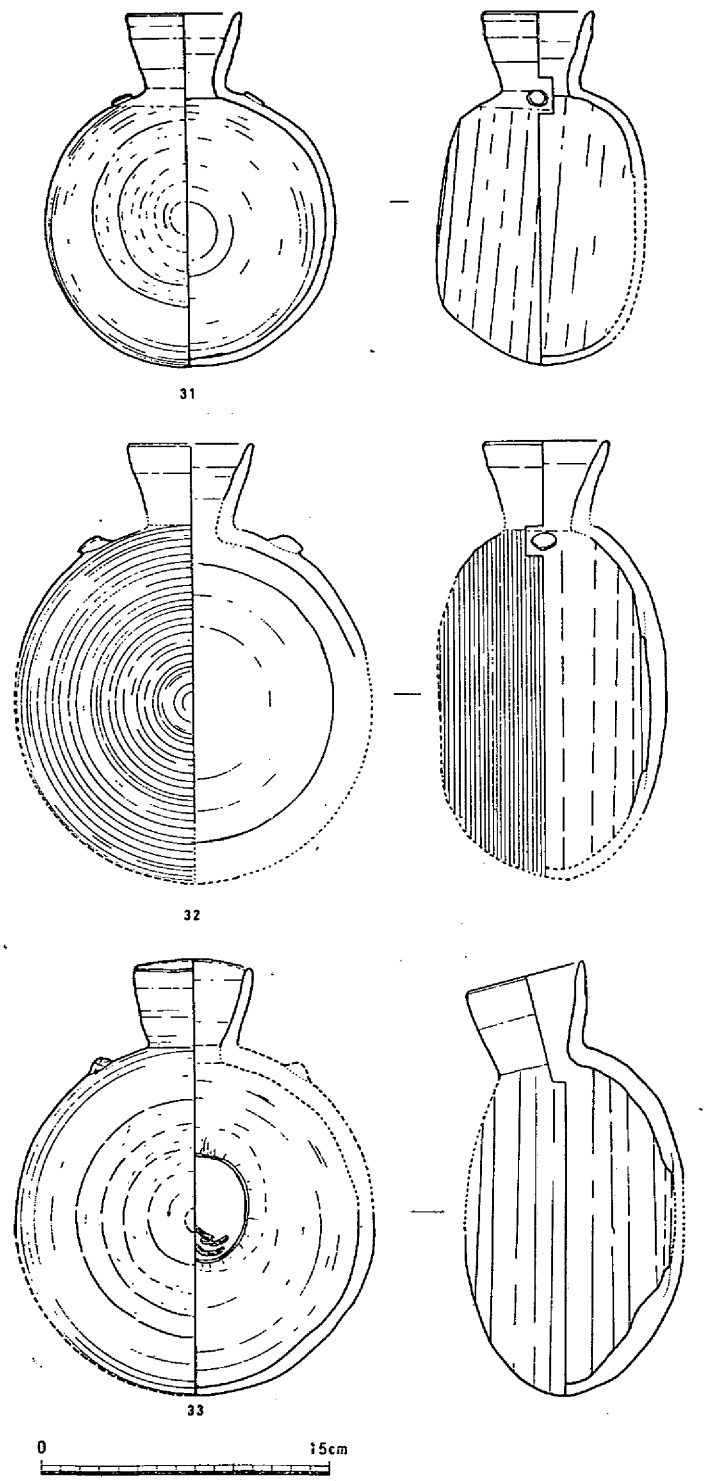
龍王塚古墳は盗掘を受けていたにもかかわらず，出土した遺物の種類や個体数が比較的多く認められた。

土器はいずれも須恵器であった。石室内の覆土や石室の入口に面した南斜面の堆積土をフルイによって精査したが，龍王塚古墳に伴う土師器は検出できなかった。須恵器の器種と数量は，杯蓋14点以上（復元完形品7点），杯身10点以上（復元完形品6点），高杯2点，小型壷1点，提瓶4点（復元完形品3点），大甕片整理箱1箱であった。

武器に関する遺物は，大刀2点，刀子1点，鍔1点，刀装具6点以上，鉄鏃9点以上であった。2点の大刀はどちらも著しく破損しており，10片以上の破片になっていた。小破片になっていたものが多い刀装具には，圭頭大刀の柄頭と推定




第10図　龍王塚古墳出土須恵器（1）（1/4）




第11図　龍王塚古墳出土須恵器（2）(1/4)

する金銅製のものも認められた。なお鉄鏃と考えた欠損している遺物には，鉄釘と区別できないものも存在した。

出土した馬具のほとんどが破損していたので，丹念に接合を試みた結果，ほぼ1セット分が副葬されていたと推定される鉄製品が存在した。馬具の種類としては，轡や辻金具などのほかに，兵庫鎖に続く鉸具の破片も認められた。

木棺に使用されていたと考えられる鉄釘が16点以上も出土した。断面の形態が長方形や正方形を呈し，頭部は屈曲したり折れ曲げたりしていた。頭部や脚端部が欠損しているものには，鉄鏃と区別できないものも存在した。

龍王塚古墳は海岸から遠く離れた位置に所在した古墳であったが，2点の釣針が出土した。この釣針は極めて特異な遺物で，1点には紐を巻き付けた痕跡が残存していた。

装身具としては，勾玉1点，切子玉4点，耳環2点

が出土した。勾玉は瑪瑙製で，円孔部分と表面の一部が欠損していた。切子玉はいずれも水晶製で，石室内の覆土中より床面から浮いた状態で出土した。2点の耳環は，どちらも鉄地に金銅を貼り付けたものである。1点は玄室の東側壁に近接して床面から出土したが，片方は周溝から平安時代と推定される土師器の破片に混在して検出したものである。

**表―1　龍王塚古墳出土土器観察表**

| 番号 | 器種 | 最大径 | 口径 | 器高 | ヘラ削り | 土器回転 | 胎土中の砂粒 | 焼成 | 色調 | 仕上げナデ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 杯蓋 | 14.38 | 14.06 | 4.40 | 左 | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 灰色 | ○ | ○内外面とも火ぶくれが認められる。<br>○外面の口縁部に自然釉の胡麻が付着している。<br>○完形品。 |
| 2 | 杯蓋 | (14.50) | (14.30) | (2.60) | (―) | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗青灰色 | (―) | ○16とセットになる可能性が強い。 |
| 3 | 杯蓋 | (14.00) | (14.40) | (3.00) | (―) | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 暗青灰色 | (―) | |
| 4 | 杯蓋 | 14.14 | 13.99 | 3.35 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 不良 | 暗灰白色 | ○ | ○粗雑な造りになっている。 |
| 5 | 杯蓋 | (13.55) | (13.25) | (3.60) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 濃青灰色 | ? | |
| 6 | 杯蓋 | 13.40 | 13.20 | (3.90) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 濃青灰色 | ○ | ○口縁部に細かい刻目が存在する。 |
| 7 | 杯蓋 | (13.80) | (13.50) | (3.30) | 左 | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 青灰色 | (―) | |
| 8 | 杯蓋 | 13.45 | 13.35 | (4.05) | 左 | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 青灰色 | ○ | ○全体に歪んでいる。<br>○完形品。 |
| 9 | 杯蓋 | (13.50) | (13.20) | (3.10) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | ○ | |
| 10 | 杯蓋 | 13.38 | 13.07 | 4.42 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 濃青灰色 | ○ | ○火ぶくれが認められる。<br>○完形品。 |
| 11 | 杯蓋 | 13.39 | 13.09 | (4.05) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 黒灰色 | ? | ○全体に歪んでいる。<br>○完形品。 |
| 12 | 杯蓋 | 13.15 | 12.95 | 4.05 | 左 | 右 | 黒色粒 | 良好 | 黒灰色 | ○ | ○全体に歪んでいる。<br>○天井部は平坦である。<br>○完形品。 |
| 13 | 杯蓋 | 13.00 | 12.50 | 4.35 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗青灰色 | 無 | ○粗雑な造りになっている。 |
| 14 | 杯蓋 | 12.37 | 11.70 | 3.87 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | 無 | ○完形品。 |
| 15 | 杯身 | 15.22 | 12.93 | 4.18 | 左 | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 灰色 | ○ | ○火ぶくれが認められる。<br>○1とセットになるかもしれない。 |
| 16 | 杯身 | (15.50) | (12.56) | (4.25) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 普通 | 暗青灰色 | 無 | ○粗雑な造りになっている。<br>○完形品。 |
| 17 | 杯身 | (15.20) | (12.90) | (2.40) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗灰色 | (―) | ○完形品。 |
| 18 | 杯身 | (14.60) | (12.40) | (4.00) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 濃青灰色 | (―) | |
| 19 | 杯身 | (14.30) | (11.45) | (2.50) | ― | 右 | 白色小砂粒<br>黒色粒 | 良好 | 灰色 | (―) | ○全体に歪んでいる。 |
| 20 | 杯身 | 14.20 | 11.80 | 3.56 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 黒灰色 | ○ | ○完形品。 |
| 21 | 杯身 | 13.98 | 11.40 | 4.18 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 濃青灰色 | 無 | ○完形品。 |
| 22 | 杯身 | (13.85) | (11.35) | (2.95) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗青灰色 | (―) | ○硬質である。 |
| 23 | 杯身 | 13.96 | 11.55 | 4.00 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | ○ | ○完形品。 |
| 24 | 杯身 | 13.99 | 11.40 | (4.20) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 灰色 | ? | |
| 25 | 高杯 | (8.60) | (8.30) | (3.65) | (―) | 右 | 白色小砂粒 | 普通 | 淡灰色 | (―) | |
| 26 | 高杯 | (10.45) | ― | (0.90) | (―) | ― | 白色小砂粒 | 普通 | 灰色 | ― | |
| 27 | 壺 | (12.40) | (12.00) | (4.80) | (―) | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | ― | ○口縁部は折り返しになっている。 |
| 28 | 蓋 | (9.70) | (8.40) | (2.70) | (―) | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 灰色 | ― | |
| 29 | 提瓶 | 13.30 | 3.60 | (16.80) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | ― | ○破片の個体である。 |
| 30 | 甕 | ― | ― | ― | ― | ― | 白色小砂粒 | 良好 | 青灰色 | ― | ○同一個体の破片が多量に存在する。 |
| 31 | 提瓶 | 15.25 | (5.85) | 18.60 | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗青灰色 | ― | |
| 32 | 提瓶 | (18.60) | (6.40) | (23.80) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 普通 | 灰白色 | ― | ○胴部にカキ目が存在する。 |
| 33 | 提瓶 | 18.70 | 6.12 | (22.20) | 左 | 右 | 白色小砂粒 | 良好 | 暗青灰色 | ― | ○胴部にカキ目が存在する。 |

数字の単位はcmである。

土器（第10・11図，図版17～19—1）

**須恵器（1～33）**　龍王塚古墳の石室内や石室の入口に面した南斜面から出土した土器は33個体以上で，実測が可能であったものについて図化を行った。それぞれの土器の形態や成形手法の特徴は，前記の観察表を参照されたい。

武器（第12・13図，図版19—2・20—1）

**大刀（34・35）**　2点の大刀が存在したと考えられる。

全体の規模が大きな大刀（**34**）は，刃部の幅が3.0㎝から3.6㎝を測り，茎部から切先へ移行するにしたがって幅が狭くなっていた。切先の先端部分は欠損した状態になっていたが，副葬された当時からすでにこのようになっていたのか，判断することができなかった。刃部は著しく破損していた。図化したもの以外に4片の破片が存在するから，刃部の全体の長さは約59.5㎝になるであろう。

規模が小さな大刀（**35**）は，切先と刃部を検出しただけで茎部は存在しなかった。刃部の最大幅は2.8㎝で，図化できなかった3片の長さを加えると，最も短くて約39.0㎝の刃部の長さが想定される。

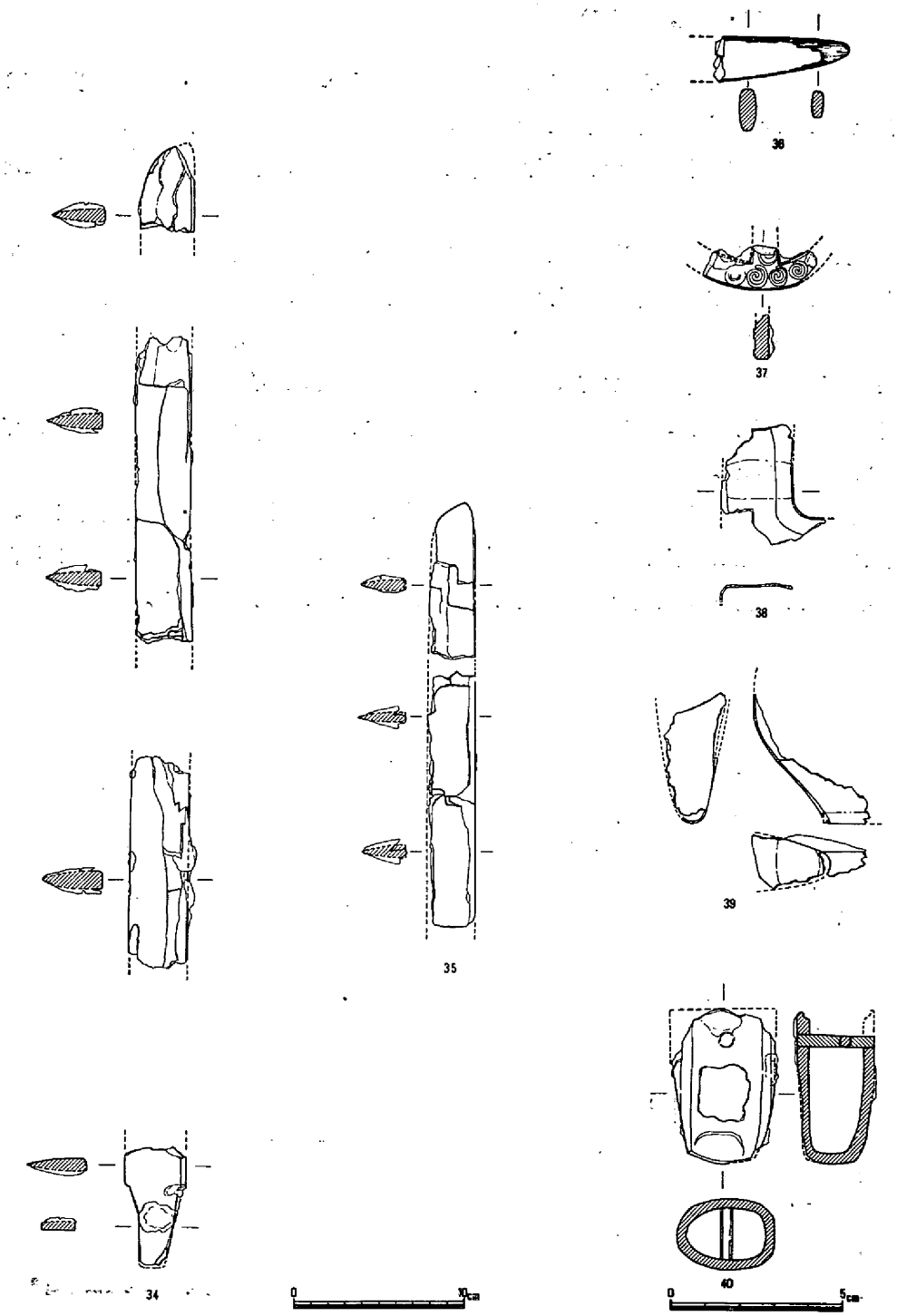
**刀子（36）**　茎部と推定される破片が出土した。全体に木質が残存していたが，目釘穴は存在しない。

**鍔（37）**　大刀の鍔と思われる断片を検出した。極めて小破片であるから全容を把握することができないが，渦巻状の装飾が施されていた。

**刀装具（38・39）**　石室の入口に面した南斜面の堆積土を選別した結果，頭槌大刀や圭頭大刀の柄頭を想起させる刀装具の断片を検出した。いずれも著しく破損していたため，図化できたのは2片だけであった。極めて薄い鉄地に金銅を張り付けたもので，全体の厚さが1㎜にも達しない精巧な構造になっていた。

**鞘尻金具（40）**　大刀の鞘尻金具と考えられる遺物が出土した。断面の形態は，長径28㎜，短径21㎜の楕円形を呈し，内部には約3㎜の厚さを測る目釘が残存していた。

**鉄鏃（41～49）**　鉄鏃と推定される鉄製品は9点であった。刃部を知ることができるものは4点で，3種類の形態が認められた。**41**は刃部の比較的大きな尖根式の鉄鏃である。刃部の長さは57㎜，幅は21㎜，厚さは3㎜で，鎬は確認できなかった。**42**と**43**は細根式の鉄鏃である。**43**の刃部の長さは26㎜，幅は11㎜であった。**44**は平根式の鉄鏃であるが，詳細な計測値は不明であった。なお刃部を欠損した2点の鉄製品（**45・49**）は，鉄釘になるのかもしれないが，鉄鏃と区別することはできなかった。




第12図　龍王塚古墳出土大刀（1/4）・刀子（1/2）・刀装具（1/2）

馬具（第14・15図，図版21）

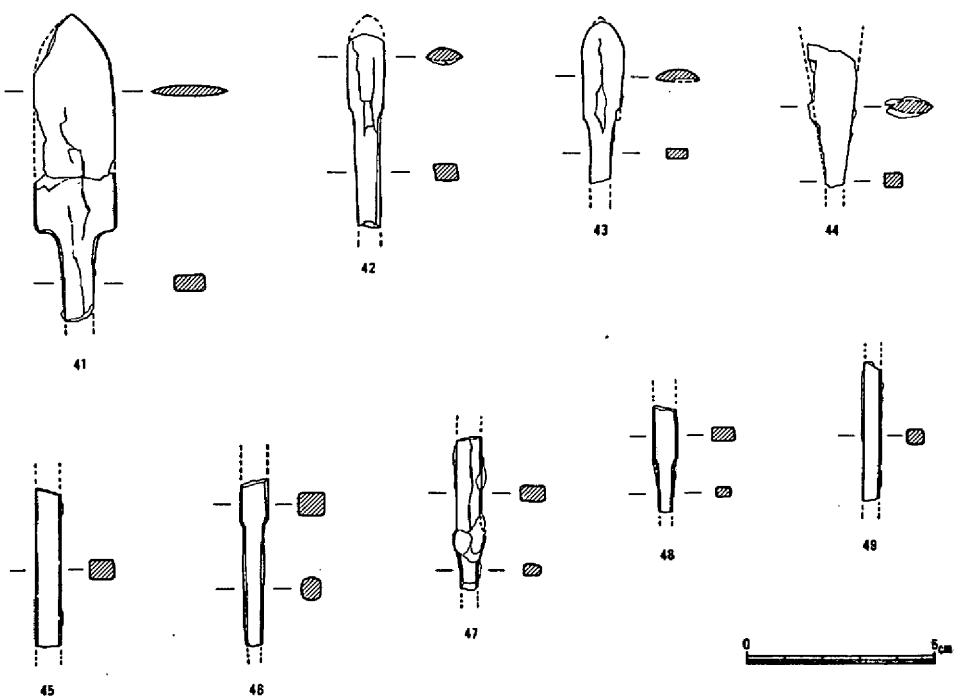
**轡（50～52）**　轡の引手か銜になると考えられた鉄製品の，環状部（50・52）と棒状部(51)が出土した。いずれも著しく破損していたため，全容を知ることはできなかった。

**鏡板（53）**　この遺物は極めて小破片で全体の形態が把握できなかったが，素環の鏡板になる可能性が強い。

**辻金具（54・55）**　環状の辻金具と推定される鉄製品が，石室の入口に面した南斜面から出土した。どちらもほんの一部の小破片で破損が著しいが，同一個体とは考えられなかった。

**留金具（56・57）**　馬具の留金具と思われる2種類の遺物が出土した。56は方形を呈するもので，鉄板を裏面に折り曲げていた。鋲は4か所に打ち込まれていたと考えられるが，錆が著しくて確認できなかった。57は花弁を模倣した飾留金具である。裏面は平坦になり，鋲の頭部は錆で不明であった。

**鉸具（59～61）**　鉸具の先端部分（59）と，兵庫鎖に接続したもの（60・61）が存在した。いずれも石室の入口に面した南斜面の堆積土からフルイによって選別したもので，丹念に接合作業を試みた結果，やっと出土遺物の形態が推察できるようになったのである。




第13図　龍王塚古墳出土鉄鏃(1/2)

**兵庫鎖（60～64）**　壷鐙に続く兵庫鎖の一部で，鉸具の基部と接続しているもの（**60・61**）も認められた。これらの兵庫鎖の断面形は，どの部分もほぼ同じ隅丸方形を呈していた。

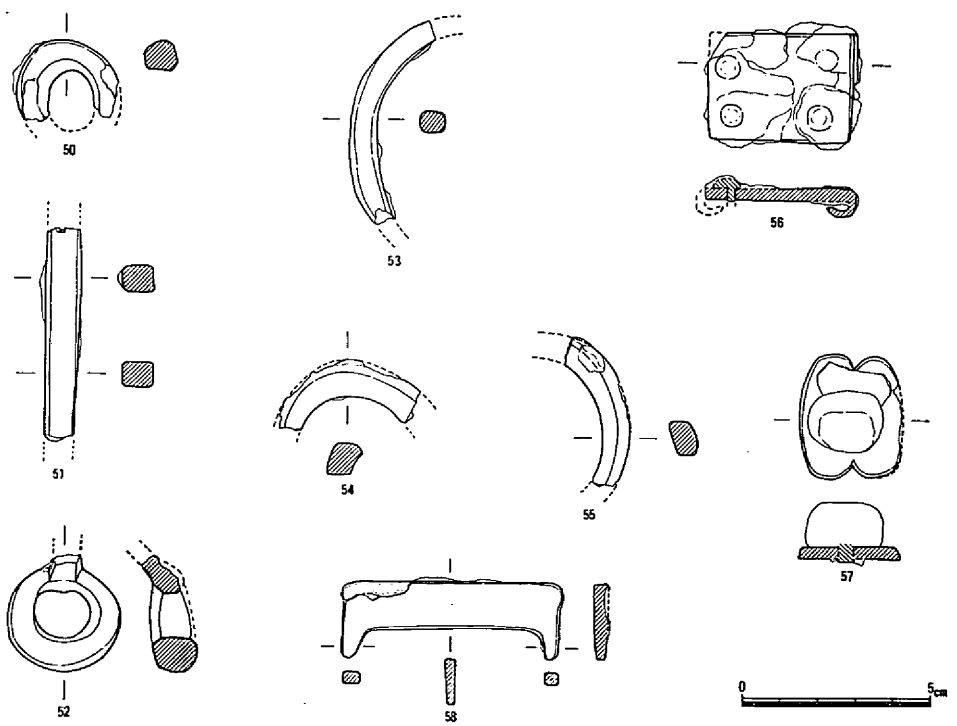
**壷鐙（65・66）**　壷鐙の頭部に位置する環状の金具で，**65**と**66**で１対になると考えられた。どちらも断面形は，中央部でほぼ隅丸方形を呈し，鐙の木質部につながる部分で幅15㎜，厚さ２㎜の薄い長方形になる。後者の長さは不明だが，円錐形に広がって行くことは確認できた。

**輪鐙（67）**　輪鐙の可能性を考えさせるが，小破片で保存状態が極めて悪いため，断定することはできない。

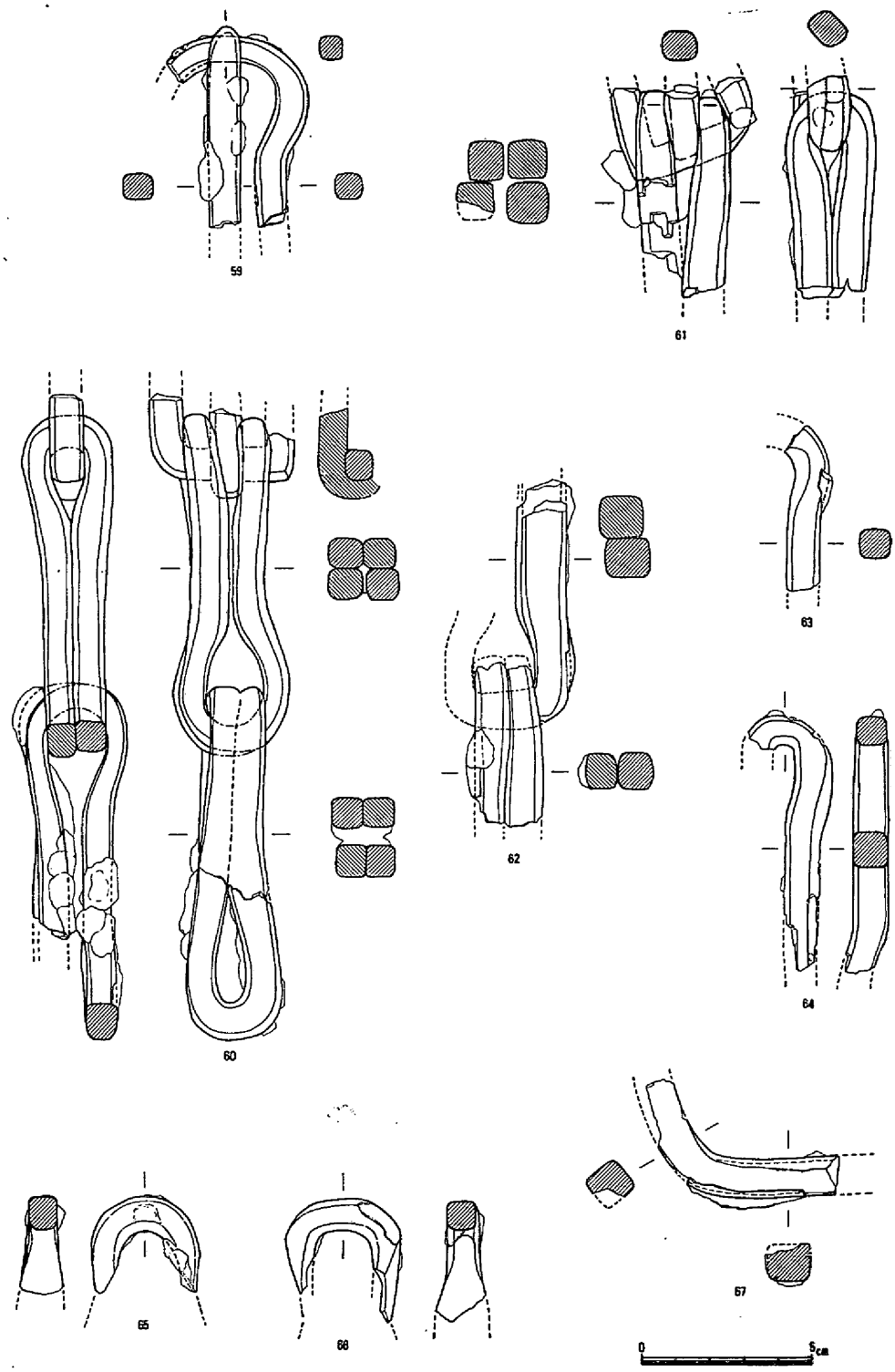
以上に説明した馬具と考えられる鉄製品以外に，用途が不明なもの（**58**）が存在した。厚さが３㎜から４㎜で全長が59㎜の板状を呈するもので，両端は細くなって短く屈曲していた。

**棺具**（第16図，図版20―２）

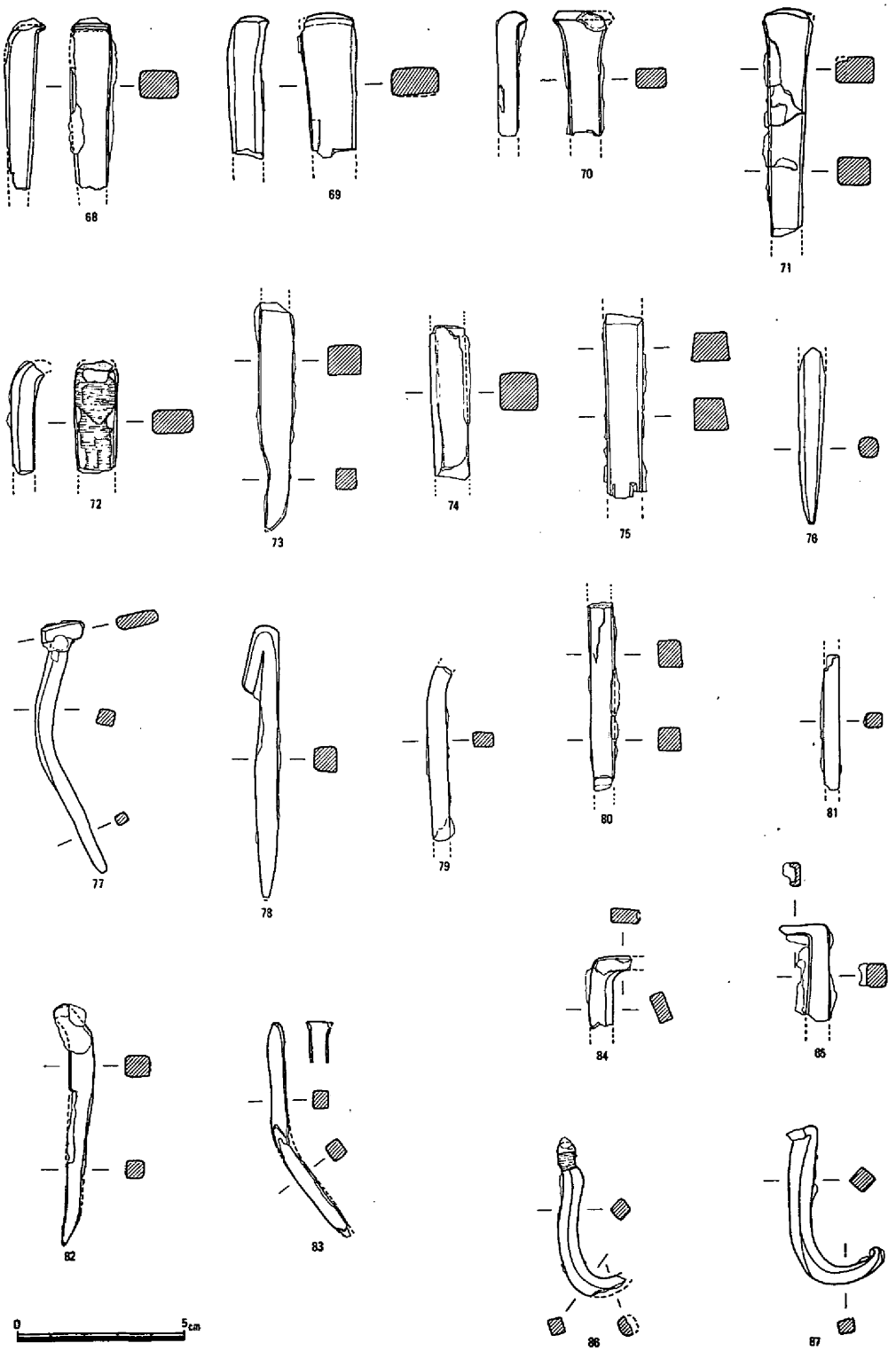
**鉄釘（68～83）**　石室内の覆土や石室の入口に面した南斜面から，木棺に使用していたと考えられる鉄釘が出土した。盗掘を受けて石室内が著しく撹乱されていたから，破損したものが多く認められた。頭部の形態には，わずかに肥厚して短く屈曲したもの（**68～72・82・83**），「T」字状を呈したもの（**77**），鋭く折り曲げられたもの（**78**）が存在した。断面はいずれも隅




**第14図　龍王墳古墳出土馬具（1）（1/2）**




第15図　龍王塚古墳出土馬具（2）（1/2）




第16図　龍王塚古墳出土鉄釘（1/2）・飾金具（1/2）・釣針（1/2）

丸方形または隅丸長方形を呈し，木質が残存していたもの（72）や全体に歪んで彎曲したもの（77・83）も認められた。74と75の断片は，引手か銜の棒状部になる可能性も否定できない。

**飾金具（84・85）**　木棺の飾金具と推定される鉄片が存在した。84は両端が欠損して不明であるが，「L」字状に屈曲して全体の断面が隅丸長方形を呈していた。85は84と同様に端部が「L」字状に屈曲していたが，断面は薄い「コ」字状になっていた。

漁具（第16図，図版20―2）

**釣針（86・87）**　内陸部に所在した古墳としては，極めて珍しい遺物の釣針が出土した。86には紐を巻き付けた痕跡が残存し，先端部の断面が円形を呈していた。87は全体の断面が隅丸方形で頭部が短く屈曲していたから，釣針状に曲がった鉄釘の可能性も否定できない。

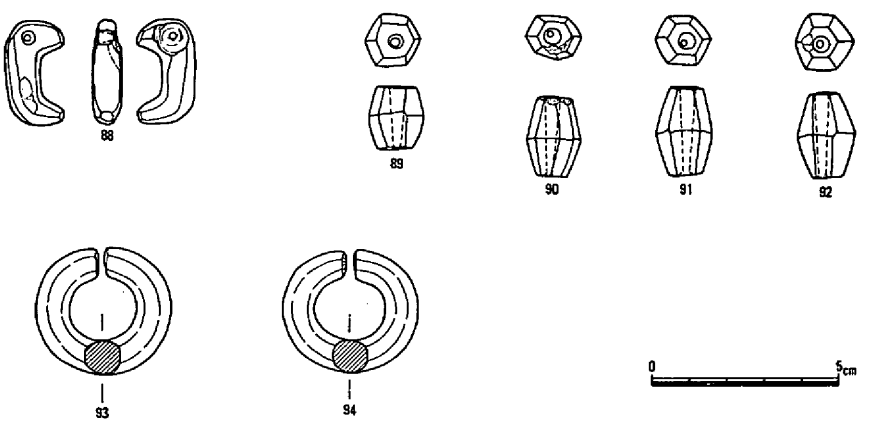
龍王塚古墳から出土した特異な遺物として，約824gの鉄滓（図版22―2）が存在した。数量は約70個で，ピンポン玉の大きさのものが多く認められた。

装身具（第17図，図版22―1）

**勾玉（88）**　羨道部の覆土から出土した瑪瑙製の勾玉である。長径27mm，重さ3.6gを測り，円孔部分と表面の一部が剥離していた。

**切子玉（88～92）**　石室の覆土内から4点が出土した。いずれも水晶製で，表面の一部を欠損しているものの完形品であった。長さは17mmから23mmを測り，4.4gから6.1gの重さになっていた。中央部の円孔は片方から穿たれ，わずかに向かえ打ちを行っていた。

**耳環（93・94）**　玄室の床面と周溝から出土した。どちらも断面の厚さが9mmで，鉄地に金銅を貼り付けた丁寧な造りになっていた。重さは34.8g（93）と35.8g（94）であった。




第17図　龍王塚古墳出土勾玉（1/2）・切子玉（1/2）・耳環（1/2）

# 第7節　龍王塚古墳に伴わない遺物

龍王塚古墳の周溝内には炭化物や焼土を含む黒褐色土が堆積し，平安時代と推定される土師器の破片が比較的多く出土した。石室内の奥壁部分の覆土中には，中世と考えられる土師質土器が存在した。龍王塚古墳の北西部分に位置した表土面からは，弥生式土器の破片がまとまって出土した。その土器片が出土した地点を中心に精査したが，遺構は存在しなかった。石室の入口に面した南斜面の堆積土からフルイで遺物を選別したが，武器や馬具の鉄製品などに混在して石庖丁と石鏃を検出した。

**弥生時代の遺物**（第18図）

**弥生式土器（95～102）**　やっと図化することが可能であった小破片の土器が，8個体だけ存在した。壺形土器の口縁部（**95・96**）は，拡張して外面に凹線状の窪みが認められた。**95**の頸部には，外から内方向へ刺突した円孔と凹線が施されていた。甕形土器の口縁部（**97～99**）は，鋭く折り曲げられて全体に横ナデを行っていた。台付土器の脚部破片（**100**）には，指頭圧痕が認められた。高杯形土器の脚部（**101**）と甕形土器の底部（**102**）の内面には，ヘラ削りが施されていた。

**石庖丁（103）**　穿孔痕が残存した破損品で，表面が著しく剝離していた。

**石鏃（104）**　サヌカイト製の石鏃で，両端の基部が欠損していた。重さは0.5$g$であった。

**平安時代の遺物**（第19図）

**椀（106～119）**　龍王塚古墳の周溝から出土した。口縁部は内彎して立ち上がり，端部は丸く仕上げていた。高台はいずれも貼り付けで，接合部を横ナデしていた。これらの土器片には，内面だけに炭素を吸着させて黒色を呈したもの（**108～114**）も認められた。

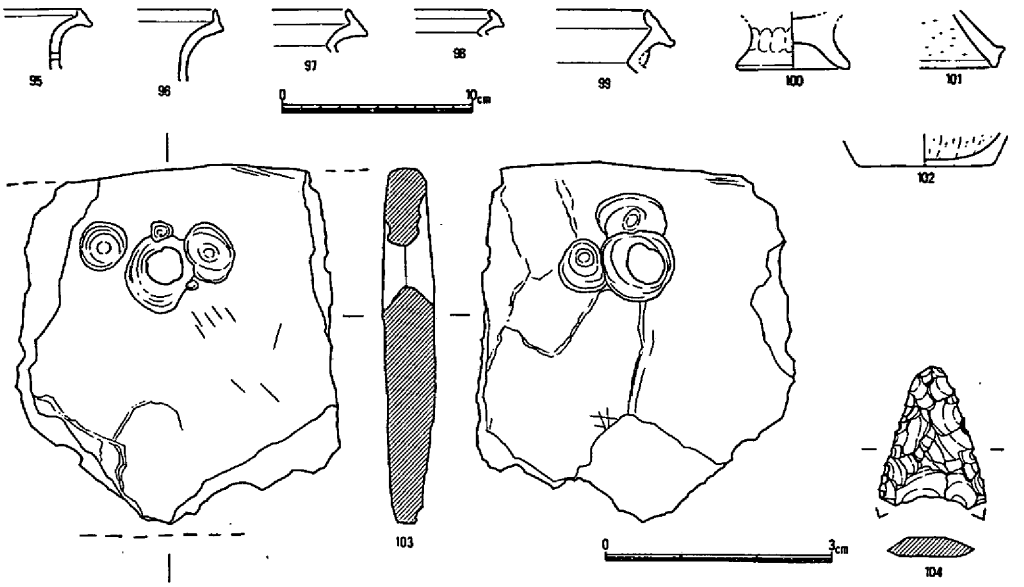
壺または甕になると推定される大型土器の小破片が存在したが，確実な形態は不明である。

**中世の遺物**（第20図）

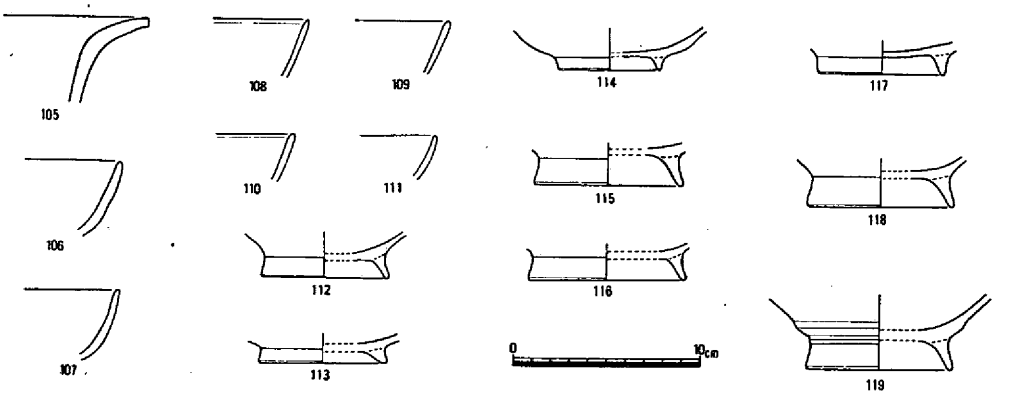
**鍋（120）**　口縁部の小破片である。外面の体部には縦方向のクシメが存在したが，口縁端部は横ナデを施していた。

**鉢（121・122）**　どちらも土師質の鉢で，内面には横または縦方向の条線が認められた。

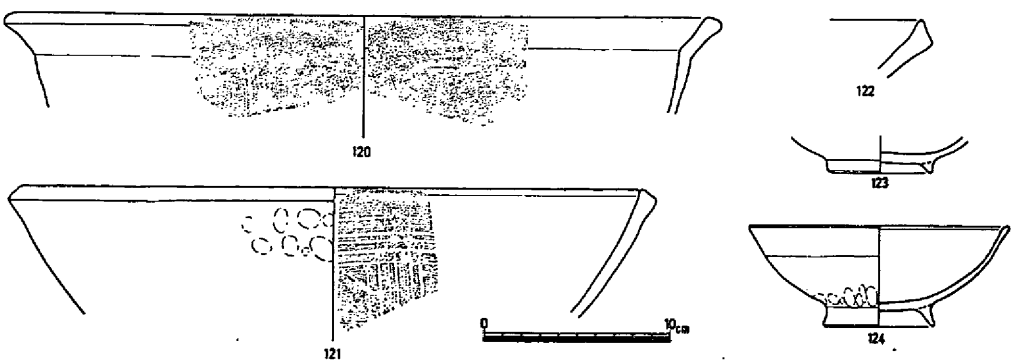
**椀（123・124）**　岡山県内を代表する中世の遺物で，「早島式土器」と呼ばれている。内面には丁寧なナデを加え，外面には指頭圧痕が顕著に認められた。




第18図　龍王塚古墳周辺出土弥生式土器（1/4）・石庖丁（1/1）・石鏃（1/1）




第19図　龍王塚古墳周溝内出土平安時代土師器（1/4）




第20図　龍王塚古墳周辺出土中世土師質土器（1/4）

# 第5章 ま と め

龍王塚古墳は，岡山市杉谷544—1に所在した。この地域は市街地から離れていることもあって，遺跡の分布状態があまり把握されていない所である。ところが昭和5年に刊行された永山卯三郎著の『岡山縣通史』には，龍王塚古墳が「大正8年以来の実地調査に係る馬屋上村所在の古墳」として記載されているから，地元では以前から周知の著名な古墳であったことがうかがわれるのである。

**立地** 龍王塚古墳が立地した地点は，小高い丘陵の頂部からわずかに南側へ下った緩斜面であった。眼下には狭くて階段状を呈する谷水田が細長く連なって認められるものの，可耕地は極めて少ない。この龍王塚古墳が所在した丘陵全体を丹念に精査したが，近接した地点には古墳は認められず，南に遠く離れた位置の丘陵裾部に2基の古墳が存在するだけであった。

**構造と規模** 検出した周溝の痕跡から龍王塚古墳の規模を測定すれば，直径が約17mの円墳であった。奥壁に面した北側と東西両側の周溝は，幅が広くなって土壙状を呈していた。
墳丘の盛土は残存状態が良好で，全体が半円球形になっていた。天井石の上面には，淡赤褐色土または赤褐色土が灰黒褐色土または灰褐色土と何層にも帯状に重なって版築状を呈し，土砂が流出しないように堅く叩きしめていた。

龍王塚古墳の石室の形態は，ほぼ南方向に開口した片袖を有する横穴式石室であった。奥壁部分と羨道部分の天井石が欠如していたものの，残存状態は比較的良好であった。石室の根石には，巨大で安定した石材を据えていた。側壁に使用された石材は，床面から上位の天井石に接する部分へ移行するにしたがって規模が小さくなり，壁面全体がわずかに内傾して立ち上がる「持ち送り」の形態になっていた。石室の規模を計測した結果，玄室約4m50cm，羨道約5m50cmの延長約10mであった。石室の入口に面した羨道部分が崩壊していた可能性も否定できないから，構築された当時の規模はさらに大きくなるかもしれない。石室の床面での幅は，玄室約1m60cm，羨道約1m10cmであった。床面から天井石までの高さは，玄室約1m80cm，羨道約1m50cmになっていた。

**時期** 龍王塚古墳の時期について，出土遺物から考えてみたい。

この古墳はすでに盗掘を受けていたため，副葬された当時の状態で石室内から出土した遺物は，杯蓋（**14**），杯身（**20・21**），耳環（**93**）の4点にすぎなかった。ほとんどの遺物は，石室内の覆土や石室の入口に面した南斜面の堆積土からフルイによって検出したもので，土器や鉄器については破片を丹念に接合したのである。したがって追葬が行われ，石室が利用された時

期に若干の幅があると推定されたが，発掘調査では把握できなかった。

出土遺物のうちでも編年が整備されている須恵器の杯に注目し，陶邑の編年（註１）と比較すれば，６世紀の後半のうちでも新しい様相を呈しているように考えられる。土器以外の遺物である武器や馬具や装身具なども，ほぼ６世紀後半の時期に出土例が多く知られているものばかりである。

**被葬者** 龍王塚古墳は内陸部に所在した古墳で，特異な遺物に約824gの鉄滓が存在した。これらの鉄滓は石室内の覆土や石室の入口に面した南斜面から出土したもので，二次的に移動して副葬当時の位置とは考えられなかった。調査の状況から判断して，古墳が盗掘される以前には，鉄滓は石室内に副葬されていたと推定された。

岡山県内の古墳で鉄滓が出土したのは，瀬戸内海沿岸地域を除くほぼ全域から約40例も知られている（註２）。最も古い古墳は，５世紀後半と考えられている津山市押入に所在した押入西１号墳（註３）で，極めて特異な例である。６世紀前半の古墳については，調査例が少なく明らかでない。６世紀後半になると，出土例が急激に増加している。鉄滓が出土する位置も，石室の内部，周溝，前庭部など多様である。７世紀の古墳にも鉄滓が伴うが，６世紀後半の時期よりも類例が少ないようである。

このように岡山県内には，６世紀後半の時期を中心に鉄滓が出土した古墳が多い。龍王塚古墳も同様の性格を有する古墳で，この地域の製鉄関係の遺跡が明らかでない現状では，何とも言えないが，鉄生産に関わった集団のひとつの傑出した墳墓ではなかろうか。

なお龍王塚古墳は海岸から遠く離れた位置に所在した古墳であったが，極めて珍しい釣針が出土した。したがって龍王塚古墳の被葬者は，瀬戸内海沿岸地域と何らかの交流があった可能性も考えられる。

註

（註１）田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年

（註２）行田裕美・安川豊史「築瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第13集　津山市教育委員会　1983年

（註３）河本清・橋本惣司・柳瀬昭彦・下澤公明・井上弘「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3　岡山県教育委員会　1973年

龍王塚古墳の発掘調査に並行して，巨石が群集した２か所の祭祀遺跡推定地の確認調査を行った（図版23・24）。その結果，両地点とも自然石が多く集まって存在していただけで，遺跡とは考えられなかった。

1.　調査前墳丘残存状況（北から）

2.　調査前墳丘残存状況（南西から）

図版　2

1.　表土除去後墳丘全景（南西から）

2.　表土除去後墳丘遠景（西から）

1.　石室正面羨道部遠景（南から）

2.　石室正面羨道部近景（南南東から）

図版　4

1.　周溝検出状況（西から）

2.　周溝検出状況（南から）

1.　石室内奥壁周辺石組状況（南から）

2.　石室内羨道部周辺石組状況（北から）

## 図版　6

1.　石室内天井石架設状況（南から）

2.　羨道部入口付近盛土状況（西から）

1.　墳丘北側周溝土層断面（西から）

2.　墳丘西側周溝土層断面（南から）

3.　墳丘東側周溝土層断面（南から）

図版　8

1.　墳丘横断土層断面（南から）

2.　墳丘縦断土層断面（西から）

1.　墳丘西側土層断面（南から）

2.　墳丘東側土層断面（南から）

図版　10

1.　墳丘盛土除去後古墳遠景（西から）

2.　墳丘盛土除去後石室全景（南から）

1.　墳丘盛土除去後石室全景（西から）

2.　墳丘盛土除去後石室全景（東から）

図版　12

1.　墳丘盛土除去後石室全景（南東から）

2.　墳丘盛土除去後石室全景（北西から）

1.　石室外玄室側壁石組状況（西から）

2.　石室外玄室側壁石組状況（東から）

図版　14

1.　石室外天井石周辺石組状況（西から）

2.　石室外天井石周辺石組状況（北から）

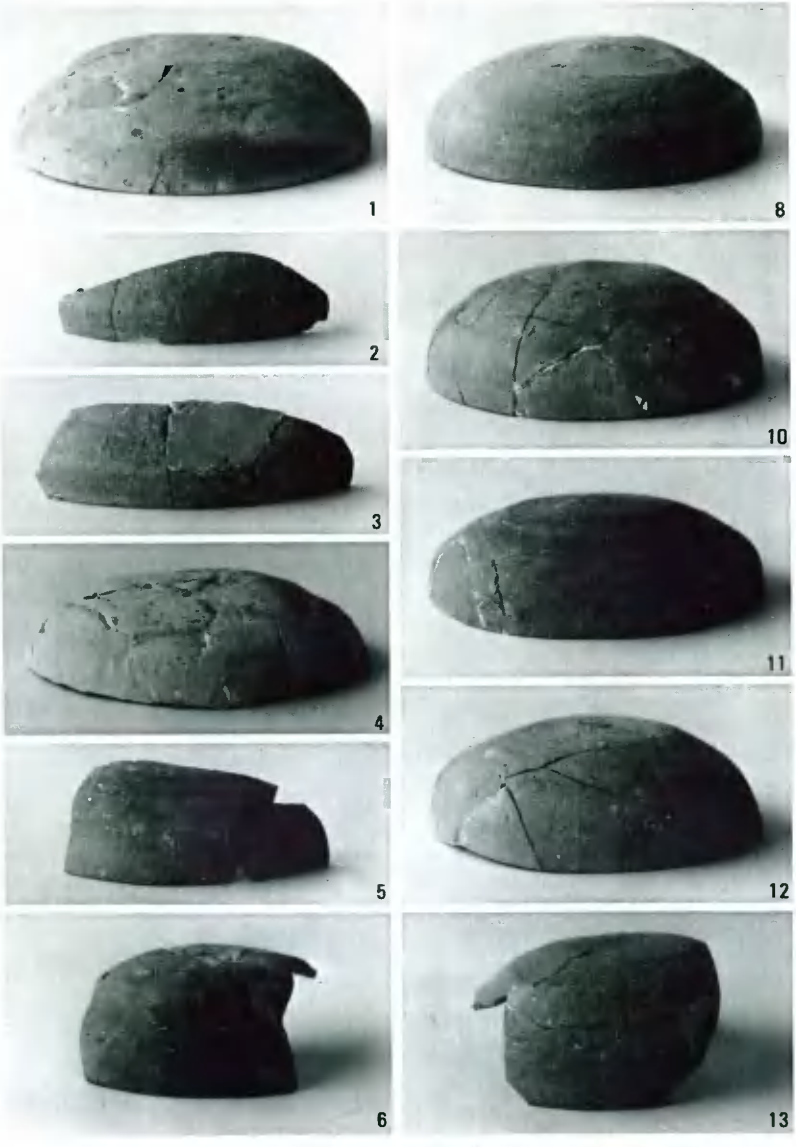
1.　墳丘検出作業風景（西から）

2.　墳丘盛土観察用畦除去作業風景（西から）

図版　16

1.　墳丘盛土除去作業風景（北西から）

2.　墳丘盛土除去作業風景（南西から）




龍王塚古墳出土須恵器（1）

図版　18

14

15

16

18

19

20

21

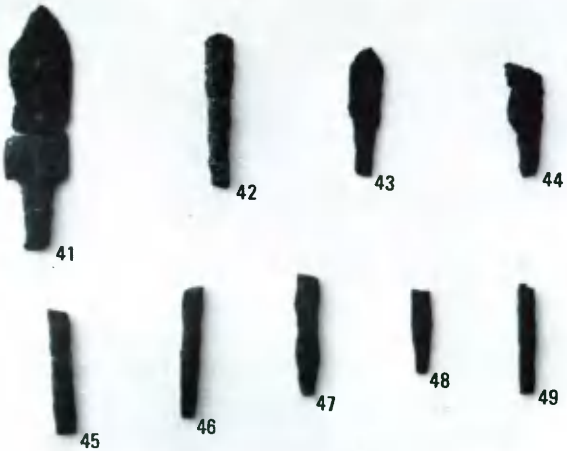
22

23

24

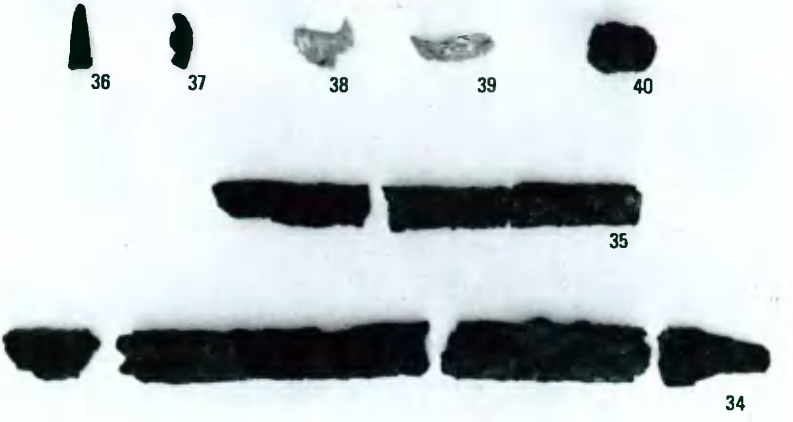
29

1.　龍王塚古墳出土須恵器（3）

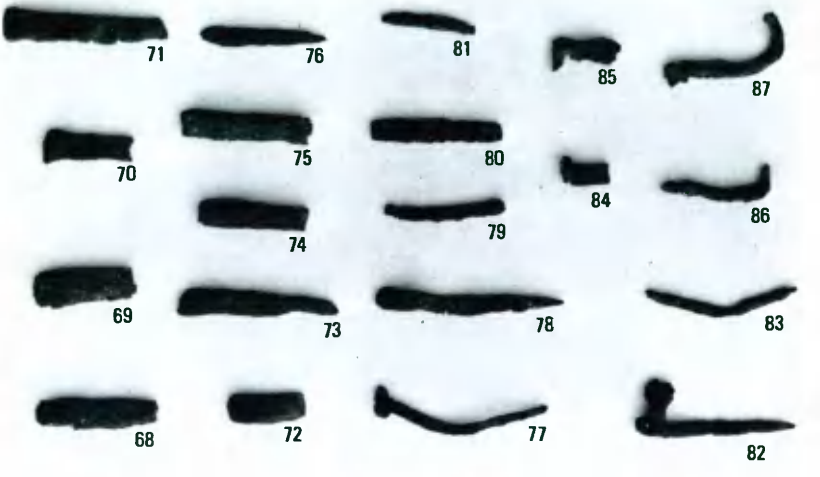



2.　龍王塚古墳出土鉄鏃

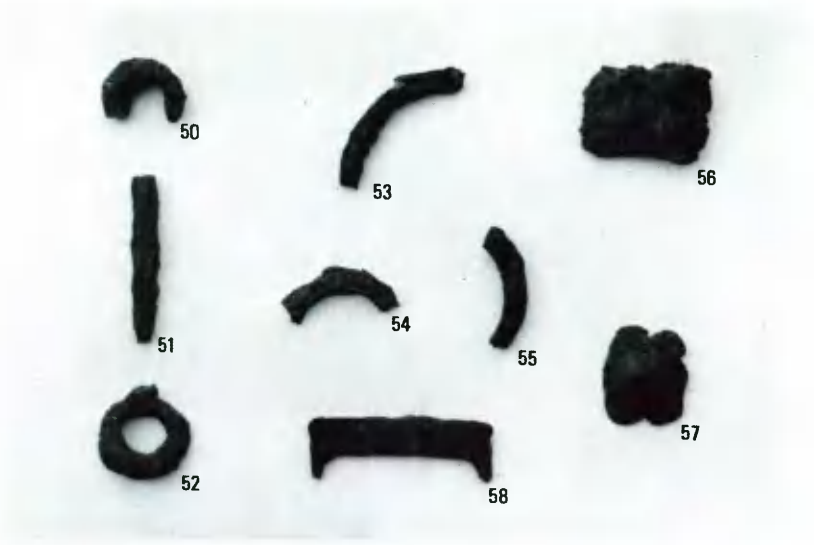
図版　20




1.　龍王塚古墳出土大刀・刀子・刀装具



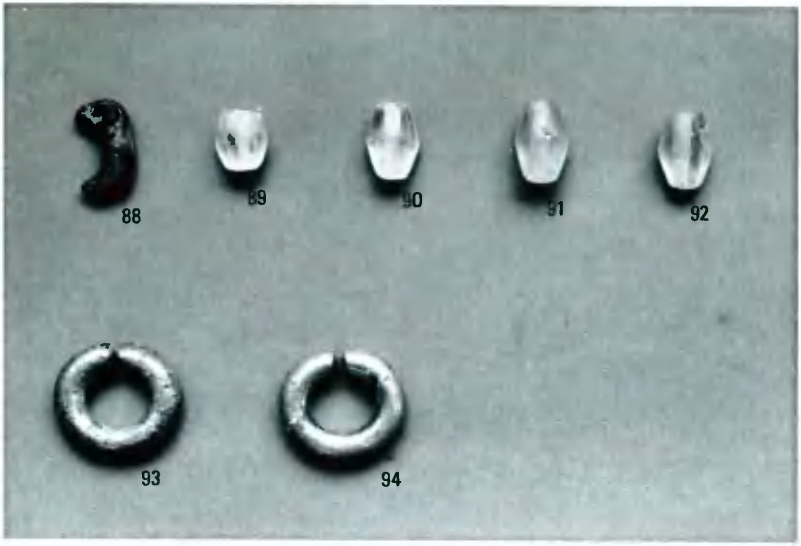

2.　龍王塚古墳出土鉄釘・飾金具・釣針




1. 龍王塚古墳出土馬具（1）

2. 龍王塚古墳出土馬具（2）

図版　22




1.　龍王塚古墳出土勾玉・切子玉・耳環

2.　龍王塚古墳出土鉄滓

1.　祭祀跡推定地A地点調査前全景（北から）

2.　祭祀跡推定地A地点調査後全景（西から）

図版　24

1.　祭祀跡推定地Ｂ地点調査前全景（西から）

2.　祭祀跡推定地Ｂ地点調査後全景（西から）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　58

龍　王　塚　古　墳

——新岡山空港建設に伴う発掘調査——

昭和59年 5 月30日　印刷
昭和59年 6 月30日　発行

編　集　　岡山県教育委員会

印　刷　　岡山県農協印刷株式会社